

て所見を逃ぶること叶はぬ。曉、精神鬱快として殆んど人事を忘るゝに至る如き、これなり。

「生は貴嬢の風采を慕ふこといと永かりし、而して親友たるの時日は斯くの如くそれ短し。生は貴嬢の親友として世を送るを得ば他に何の求むる幸福あらんや、と曾て思考したりき。計らざりき、此得難き幸福を破つて、遠く貴嬢に別るゝの日に迫らんとは。嗚呼天もまた無情なるか。今や貴嬢に別れて遠く去らんとするに際し、聊か貴嬢に懇願するところあり。そは、生の不幸を聞いてたも、といふ一事これなり。

「貴嬢は常に生の幸福なるを祈り給ふ我親友なりかし。然らば、則ち生の不幸を察して心の苦を慰むる術もあらば是を指し呉れ給ふべき道徳上の義務を有ち給

春

ふ御身なるべし。これ生が誰にも語らぬ心中の苦を打明けて、貴嬢に書き送りませぬ所なりかし。抑も生が所謂心中の苦とは何者ぞ。左に生の経歴を述べて、以て其詳細を御話し申さん。

春

「嗚呼、もし生をして一の大家たるを得る。曉ありと念はしめば、生は今に於て自己の履歴を語るの必用なかるべし。生は寧ろ堂々たる自傳を玉の如き名筆もて書き始むべし。然れども其望なしとせば、生は暫時の間おもしろき妄想を持ちたることを匿さず白状すること可けれと思ふなり。實に生の生活は、世の有爲の少年の爲に、一部の警戒書となるべし。生の失敗は以て彼等に示すべし。秘し隠すべきものにあらず。

「生の父は、封建制度の下にありて嚴格なる式禮の間に成長したる人にも關はら

春

ず、傲慢磊落の氣風あり。されど或る一部分に至りては極めて小心なる所もあり。明治十一年祖父の中風病にかゝるや、直に官を辭して郷里に歸り、爾後七年間孝養を盡して怠る所なく、是が爲に僅かの財産も消費し去れども意に介せざる如き、其小心なる一例なるべし。又、生の母は、最も甚しき神經質の恐るべき人間なり。一家を修むるにも唯己れの欲する如く、己れの書き出せる小よさ模範の通りに、配下の者共を處理せんとする六ヶしき將軍なり。偕、生の神經の過敏なる惡質は、これを母より受け、傲慢不羈なる性は、これを父より貰ひたり。言葉を變へて、これを言へば、丁度五分と五分の血を父母より受けて斯世に現れたり。』

春

青木未亡人は讀みつゞけた。

『明治六年、生の父母は生を祖父母に託して東都に去れり。十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられたり。斯貴重なる時日の教育に就き一言せざるべからず。生の祖父は、凡そ世にめづらしき嚴格の人にして、活潑に飛跳ることを好む少年を懲すの術に苦みたる事、今もしばく祖母の物語は聞き得る事ともなり。又、祖母は今でこそ至つて温順なれど、其頃は生に取りて餘り利益を與へしとは覺えず。何となれば、彼女は實の祖母にあらずして、生に對してはマ、

春

祖母たる人なればなり。生の天性は不羈磊落我儘氣隨なるに、斯のやかましき祖父と、我が利益には餘り心配せぬ祖母との間に養育せられたるなれば、こゝに生が淡泊なる小兒思想は或る奸曲なるむづかしき想像心にかまされて、物事に考深き性情を作りたるの事實は決して蔽ふ可らざるどころなりとす。其頃、生の最も好みたる小説は、楠公三代記、漢楚軍談、三國誌等にして、日夜是等の小説を手離すこと能はざりし程なりき。又、生の最も喜びたる遊戯は多數の兒童を集めて軍事を真似ることにて有りし。生は常に自ら軍師となりて、進退運轉を司りたり。是等の遊戯は、わがやかましき祖父の最も嚴禁する所にてありしにも關らず、清く快き濱邊の砂上を集りて、彼處の堤是處の丘を城堡と定め、伏兵を隠す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし智勇を奮ひ、砂礫を飛して銃丸に代へ

春

長短の棒片は刀槍を代用せり。此遊戯は則ち生の祖父に對する不平を慰すへき單なる快樂にてありけり。然れども、これ以て全く生を慰むるに足らずして、鬱々として月日を過したれば、生は最も甚しき疝癰の人物となり、又極めて涙もろく、考へつめてはなかくに愈すべくもあらぬコマリモノと成りたることも亦明かならん。

「何かにつけて、生は涙を零すこと多かりし。又、口惜しくてたまらぬ時は、殆んど正體なく泣き狂へり。

「儲、明治十一年の春となり、我がやかましき祖父は中風病にかかりて、其性質は全く一變せり。生を叱責するの性は變じて、生を憐愛するの情と成れり。然れども、生は遂に溫良なる性質を受くる道には一度も接したる事なしと言ふも不可

春

なかるべし。生の血統中にも、亦温良なる好性質を有つ者は一人も無し。況んや、生の父は傲慢磊落の人にして、生の母は極めて甚しき神経質なるに於てを。『生の父母は、祖父を助けんとて東都より歸り來れり。生の活潑なる心に仇することば、母の神経質より甚しきはなし。又、生の母は普通の功名心を抱き、生をして功名を成さしめんと思ふの情切なりければ、毎夜十二時頃迄も究屈なる書机に向はしめ、母自身は是が看守人たり。また母は婦女子の性として活潑なる舉動遊戯を好まず。生を束縛して殆んどすべての頑童等と交通を絶たしめたり。生の最も苦しく思ひしは、彼の戰鬥戯を成すを得ざるにこそ。生の諸書——就中、歴史小説を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕し、寢ても覺ても其事ばかりを思ひ續け、いつも己れの一身を是等の英雄の地位に置かんことを望み居たり。且つ又、

春

生は既に考深き小兒と成りたれば、諸兒の如く笑ひ興じて愉快に光陰を送るといふことも出來ず、最も爽快にして豪放なる遊戯にあらざれば樂みと思ふこと能はざりし。又、生は父母、祖父母皆な愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ、生を親愛するもの一人もなく、人生の價値とすべき所なしと考へ居たり。これ、則ち後に生をして氣鬱病を發せしむべき最大なる原素なるべきか。

『こゝに記憶すべき一種の幸福なること有り。そは他ならず、生の母は生が小説を好むの癖あるを嫌つて、堅くこれを禁制したり。もし生にして、依然小説を讀むの権力ありて、全く身を功名心の極度に踏込ましめば、其結果は實に奈何ぞや。もろくの英雄の少時によくある例なる自死を試むるに至らんこと必せり。

春

『然れども、功名心の病は遂に生の身を誤れり。そは明治十五年に至りて、始めて純然たる病氣の形を顯しけり。

『明治十四年は生が父母に携へられて東都に移りし初年なり。生は東都に移り泰明學校といふ小學校に入りしが、斯學校は聊か以て生の不平を慰めけり、校長は東京にて第一等の教師と評判せらるゝ程の人にてありし。其人は生の淡泊なる性質を鍾愛し、最も親愛して生を教育せられたり。又、生は人の意表に出づる議論

春

を好みて、文章を作るに愉快活潑の氣象を顯しければ、卑屈コンモンなる數多の教師どもにはかに生を敬愛するに至りたり。従つて校中の評判生の一身に集り、生の最も得意とする功名心は斯學校の生活には全く其功を奏したりといふべし。斯年は、國內政治思想の最も燃え盛りたる時なりければ、生も亦その風潮に激發せられて、政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犠牲にも成らんと思ひ起せり。従來の功名心は悉く斯一點に集合し、畏るべき勢を以て生の心を支配し始めたり。斯年は多少生をして愉快に日を送らしむるを得たり。ある日、飄然として家を出て、懐には一錢の金をも持たずして、東海道を徒歩し鎌倉に遊びたり。抑も鎌倉は詩人に取ての伊太利の如く、最も生の渴望して一見せんと欲するの土地なりし。何となれば其頃生の日常讀むところは重に日本の歴史にし

て、其歴史中最も重要な事件は彼の地に於て演ぜられたればなり。又、ある日は
獨り千葉地方に遊びたり。生は斯の時滿十三年にも足らぬ少年なりしも、活潑に
是等の運動を試みけるは、實に生をして身を誤るの基たらしめたり。生は自ら謂
らく、斯くの如く活潑に生活は過行くべしと。何ぞ知らん、未だ一歳をも經ぶる
うち、生の一身は全く功名心の占領する所とならんとは。

「十四年の十二月、小學校の課程を終りて卒業の式を舉たり。生は是より先、青
年社會にありて演説の稽古を成し居りければ、少しは其心得もあるものから、演
臺に上りて一演説を試みたる所、意外の好評にて、其座にありし某新聞記者の如
きは、その雜報欄内に生を稱して奇童なりといへり。

「十五年は生をして殆んど困死せしむべき程の一年なり。それら不幸の第一着は、

春

春

わが極めて親愛せる善良の教師の去つて北海道に行けること是なり。其第二は、
生が新に入學したる私塾は實に生をして不愉快は堪へざらしめたり。其第三は、
會て熱心に盡力したる青年黨の面々散りく、に分離したることとなり。其第四
は、政府の舉動漸くをかしくなりて、斯神經質の少年をして憤慨に耐へざらしむ
る事少からず。其第五は、生よりも一層甚だしき神經家なる吾家の女將軍は、生
が活潑に粗暴を交へて動作するをいたく嫌ひて、種々の軍略を以て生を壓伏せん
と企てたり。

「右等の仇敵は交も生の心中を惱亂せしめられたれば、爰に全く活潑なる天性を損ね
て、穩着沈黙なる、肉落ち骨枯れたる一少年とこそ成りにけれ。従つて又、怯弱
なる畏懼心をも醸し、年來腹裡に蓄へたる功名心をして徒に畏れ懼くことを知

らしむるに至れり。

春

九十二

『功名心果して成すに足らざるか、生が生活は何によりて過さん、何を目的として世を送らん、など考ふれば考へる程、心を病まし氣を痛め、終日臥床に在りて涙と共に一二月を過し、何時癒ゆべしとも思はれざりし。こゝに至りて生が父は、何の原因より起りし病とは知らねど、氣鬱病とは知るものから、生を放つて

地方に旅行せしめたり。これはこれ、生が旅行の嚆矢にして、爾後重に旅行を以て氣鬱を慰むるの機具となしたるも端緒をこゝに開きしなり。

『其年五月、生は本郷なる某義塾といふに入塾せしが、これまた生をして不愉快を感じしむるもの、一たりし。

春

『翌十六年三月、生は某専門學校に入塾したり。生は常に學問の仕方は自ら修め自ら窺ひる禪宗臭き説を持ち居けり。されば學校に在りても、教科書を調べんよりは數多の書史を涉獵するこそ面白けれと、日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居たり。

『翌十七年は生をして一度怯懦なる畏怖心を脱却して、再び功名心の火を燃え盛んならしむるの歳にてありし。此時の功名心は前日のそれとは全く別物にして、

春

名利を貪らんとするの念慮は全く消え、憐む可き東洋の衰運を快復すべき一個の大政治家と成りて、己れの一身を苦め、萬民の爲に大に計るところあらんと、熱心に企て起したり。己れの身を宗教上の基督の如くに政治上に盡力せんと望めり。此目的を成し遂げんには、一個の大哲學家となりて、歐洲に流行する優勝劣敗の學派を破碎すべしと考へたり。其考は實に殆んど一年の長きに渡り一分時間も生の腦中を離れざりし。嗚呼、何者の狂痴ぞ、斯る妄想を斯る長き月日の間包有する者あらんや。

「翌明治十八年に入りて、生は全く失望落膽し、遂に腦病の爲に大に困難するに至れり。然れども少しく元氣を回復するに至りて、生は從來の妄想の非なるを悟り、こゝに小説家たらんとの望を起したり。されど未だ藝術家たらんとは企てざ

春

りし。希くは佛のヒエウヅ其人の如く、政治上の運動を織々たる筆の力もて支配せんと望みけり。斯年、生は各地に旅行し、風景の鑑賞家と成れり。又種々の人間に交際して、人情の研究家と成れり。

「斯年の暮、生は全く功名心の梯子より落ちて、是より氣樂なる生活を得たり。以上、繰述し來りたる生の經歷と性質とは以て生をして自から小説家たるを得んと自負せしむるに足るものなり。あゝ斯自負は則ち今生を苦むること一方ならざる曲者にこそ。

「生は既に自ら生活を營むべき身にてあり。鋭敏に商政を計るべき一個の無間暇男兒なり。汝をして小説家となるべき企圖を抱しめんか、汝は一椀の飯をも得る能はざるべし。しかれども汝が胸中にある小説家と成らんといふ望は遂に奪ふ可

らざるものなり。

『嗚呼、これはこれ當今生の暇多き生活に伴ひたる一個の病氣なるべし。生の身は須らく繁忙なる事業に従はしむべし。これ則ち此度生が斷然志を決して、神戸地方に遊ばんとする所以なり。』

春

『我親愛なる操嬢よ、斯くまで苦しさ生が心根を察し給へ、もし友の情あらば。』

『然れども此の病は一時のみ。去て彼地に着せしを報ずる時あらば、再び光り輝く朝日の下に幸福なる月日を過すと知りたまへ。』

斯の長い手紙は、青木がまだ一生の方向に迷つて居る頃書いたものである。讀んで行くうちに、ある處は微笑を、ある處は哀憐の情を、又あるところは言ふに言はれぬ恐怖の念を操に起させた。

春

『斯の時分から、父さんは狂人だつたんだよ。』

と操は獨語のやうに繰返した。其時、夫の友達が訪ねて來た。未亡人は店頭まで出て迎へた。

九十三

昔、岸本の二人は、青木の亡くなつた後を心配して、元數寄屋町まで様子を見に來た。彼等は未亡人に導かれて二階の部屋へ上つた。そこは青木が若い時に勉強

春

した處でもあり、種々な習作を試みた處でもあり、國府津を引揚げてから以來懊惱し苦悶した處でもある。丁度青木の書いた反古が部屋一ぱいに展げてあつて、その分量の多いことから言つても、二人の友達を驚かした。若い時から書いたものは、奈何なツマラない反古でも保存してあつて、すこしも掩ひ隠したやうな跡が無い。残して置いては可恥しいと思はれるやうなもの迄も大切に藏つてあつた。二人の友達は、雑誌へ載せたいと言つて、その反古の中を獵つたが、僅に戯曲の断片しか得られなかつた。面白いと思ふものは、反て種々な文學上の計畫を書いたものに多かつた。それは青木が胸の中に書いて居たある世界の一部分を未完成の儘に見せたと言つたやうなものである。

何故青木は自殺したらう。斯問は二人の友達が答へやうとして答へることの出來

春

ないものであつた。世間ではいろく言觸した。「食へなくて死んだんぢやないか、」と言ふものもあれば、「厭世だらう、」と言ふものもあり、「藝術の上の絶望からだ、」と解釋するものもある。是と言つて死因と認むべきものは、二人の友達にすら見當らなかつたのである。

「何故青木君は亡くなつたんでせう。」と岸本は未亡人にそれを尋ねて見た。

「さあ、私にも解りません。」斯う未亡人が答へた。

斯の「私にも解りません」が一番正直な答らしく聞えた。

其時、未亡人は嘆息して、「宅では、私にも一緒に死ねと言つたんですよ。私は嫌ですツて、答へました。子供が有りますから、私は嫌ですツて——」

妻子を置去にして死ぬといふ法があらうか、斯ういふ心地が未亡人の顔色に讀ま

れた。何となく彼女は侮辱でもされたかのやうな眼付をした。

とは言へ、操は直に寡婦らしい追懐の心に返つた。彼女は、生前夫が言つたこと爲たことを夢のやうに想ひ浮べて、それを一人の友達に語り聞かせた。『なにしろ、宅は豪放といふ方の人でしたからねえ。』と言つて彼程意氣相許したものを、と其人を惜んだり、『國府津は好うござんしたよ。』と言つて、楽しい同棲の時代のことを繰返したりした。

『是方へ参りましたから、あの刀騒をする前に、幾晩か品川へ通つたことがありました——あればかりは、奈何しても私に解りません。』

斯様なことを未亡人は附添して言つた。國府津で、岸本も思出した。彼の海岸を彷徨つて、終に青木の宿へ轉げ込んで行つた時のことは、忘れやうとして忘れる

ことの出来ない経験である。彼時、助けられた自分が生きて、助けた友達の方が死んだ。斯う考へて、岸本は名の付けやうの無い思に打たれた。

『せめて、もう十年青木君を生かして置きたかつた。』
と音も嘆息した。

九十四

『左様かなあ、細君にもよく解らないかなあ。』と岸本は元數寄屋町の家を出て、

昔と一緒に歩きながら言った。

『何故青木君が亡くなったと言はれたら、君だつても困るだらう。』と昔が言ふ。

『僕にも解らない。』

『あまり接近し過ぎて居るものには、反つてよく解らないんぢやないか。』

『さあ、左様いふところが有るかも知れないね。』と言つて、岸本は考へて、『青木君が國府津で書いた文章があつたらう、ホラ——あれなどを讀んだ時に、僕は左様思つた子、青木君は非常に潤い處を歩いてるなあつて。彼様いふ處まで出て來て居るんなら、死ななくつても可さそうに思ふんだ。』

斯様な談話をして、二人は三十間堀の方へ歩いて行つた。昔は青木と一緒に其町々を歩いた時のことを思ひ出した。其時の青木が言ふには、見給へ、ペンキ塗り

春

の家もあれば、煉瓦造りもある、昔風の日本造りもある、今の時代は物質的の革命で其精神を奪はれつゝある、外部の刺激に動かされた文明である、革命ではなくて移動である、斯う亡くなつた友達の言つたことを思ひ出して、昔はそれを岸本に話して聞かせた。

『左様だ、革命ではなくて、移動だ。』

と岸本も繰返して見た。二人は三原橋の畔に眺め佇立んで、やがてそこで別れた。青木が奮闘して倒れたといふことは、連中に取つて大きな打撃であつた。友達は皆考へた。しかし、仲間中から一人の戦死者を出したといふことが、反て深い刺激に成つて、各自志す方へ突進せうとしたのであつた。市川、昔、足立、岡見、福富、それから栗田などの書いたものは雑誌を賑した。

春

六月の四日に青木の追悼會があつた。丁度其日は青木の三週忌に當つた。

其頃から、岸本は大川端の叔父の家を出て、三輪にある兄の家の方へ移つた。彼が久し振で母や姉と一緒に住まうとした頃は、やがて可畏しい激しい波濤が家庭の内部へ押寄せて來た。兄の民助は最早家に居なかつた。これは民助が日頃信用して居た男に欺かれて、過つて偽造の公債證書を使用した爲に、鍛冶橋の未決監へ送られることに成つたからで。口煩い世間の人は、種々なことを言つた。しかし岸本の家の方はいづれも民助の善良な性質と、名譽を重んずる心と、すくなくも其日までの正しい行爲とに因つて、民助を信じて居た。唯、民助には、舊家の旦那様が附いて廻つて、人に乘せられ易いといふ弱みがあつた。又、過去の榮華が忘れられないで、やしもすると虚飾に流れたがるやうなところがあつた。兎に

春

角、豫審の終結を待つより外はない。斯うなると、家の内の混雜は浪打つやうである。忽ち岸本も其浪の中へ捲込まれた。

春

九十五

三輪の家はもと金座のなにかしが住居で、今て言ふ御用商人の建て、贈つたものとやら。斯の履歷のある廣い邸宅は、貸金の抵當として石町の大将の手に入つたものであるが、空屋にして置いては荒れるばかりだし、庭の手入も届かないし、

といふところから、買手の付くまで民助が借りて住んだのである。多忙しい身で民助が斯ういふ邊鄙な場處を擇んだといふは、旦那への義理と、今一つは家賃を出さずに住まはれた爲とて、そのかはり手車でも置かなければ商用の便じないやうな位置にあつた。こゝを住居らしくする爲には、家相應な道具も備へなければならなかつた。

春

岸本の母や姉は簡易な田舎生活に慣れて来た人達である。母が郷里から出て来たばかりの時に、『お秋、』と嫁の名を言つて、『これは皆な虚だぞい、斯様に立派に成つたと思つて、油断すると宛が違ふよ、』と女同志で話したことが有つた。其時民助も、母の件をして来た男に向つて、『これは虚でサ——虚ですけれど、斯の虚を實にしやうといふのが私の意氣込です、』と言つたことも有る。しかし、奉公

人や出入の者に向つては、それでは通らないやうな場合が多かつた。母や姉は、はじめから不安を感じて居たのである。

民助が居なくなる、間もなく山田といふ親類の男が来た。辯護士との交渉、負債の整理などは、主に斯の人と、岸本には三番目の兄にあたる幸平との二人に委せてあつた。岸本はまだ年も若し、経験は少し、それに不慣れのことであるから、自分の力に出来るだけの手傳でもして、成行を觀て居るより外に手出しのしやうも無いのであつた。

春

早速下婢へは暇を出した。まだ車夫の仁太は居る。仁太は可愛い僕で、給料は戴かなくても可いから、旦那の歸るまで置いて貰ひたいと言つて居る。根岸の小學校まで通ふ民助の娘の送迎から、朝晩の掃除は言ふに及ばず、用事がある度に

春

山田や幸平を車に乗せて彼方此方といそがしく引き廻る。それを仁太は喜んでやつて居る。

家は斯ういふ人々を容れて、まだ大き過ぎる程の構であつた。家内中集まつて食事をする部屋だけでも可成廣い。その部屋から土藏の側を通り抜けて、廊下を突當つたところに、別に座敷が二間ある。民助が居なくなつてから、兎角不用心だといふので、その座敷の雨戸などは大抵明けずに置いてあつた。

七月のはじめ、岸本は鍛冶橋まで面會に行つて歸つて來た。『暑い、暑い、』と言ひ乍ら縁側のところへ出て眺めると、庭にある蓮池の向ふには洗足で御百度を踏んで居る母親の姿が見える。池の邊には稻荷が祭つてある。母親は樹の蔭を往つたり來たりして居た。

九十六

春

異様な煙の臭氣は吉原堤に近い屠殺場の方から風に送られて來た。その煙は、水溜のある草地や、畠や、田圃などを越して、遠慮なく侵入して來る。風が持つて來る煙のことで、それを防ぐことも奈何することも出来なかつた。

庭の蓮池には蟷蛙が澤山集つて居た。岸本の母親は、その周囲を廻つて、暗い梅林の間を通り抜けて、蠶蚊に食はれ乍ら縁側の方へ近いた。民助の無罪放免を願

ふ爲に、母親は御百度參を日課のやうにして居た。陰濕た土を踏む爲か、白い足はすこし腫れて見える。斯の御百度ばかりは、家の者が何と言つて留めても、聞入れなかつた。

『母親さん、行つてまゐりました。』斯う岸本は縁側から聲を掛けた。

母親はいつまでも若い氣象を失はないやうな人であつた。信心深い額の上のところは最早すこし禿げかゝつて居たが、頬の色などには未だ艶々とした紅味が残つて、快活な、働き好な、山國の婦人らしい性質をよく表して居る。初々しい姉はこの母親があるので、僅に氣を引立てられて居る。

『ア、御苦勞さま、今日は奈何だつたい——うまく面會が出来たか子。』と母親は跣足のまゝで庭に立つて居る。

春

『駄目。』と岸本は頭を振た。『圖が遅くて、兄さんには逢へませんでした。』

『左様かい。』

『仕方が有りませんから、差入の方だけ用を足して來ました。朝はバンで可いから、晝と晩だけ辨當にして呉れなんて、兄さんもすこし贅澤ぢや有りませんか。家の方の事情はよく解らないでせう。』

『左様言ふなよ。御店でも彼様言つて下さるもんだから、差入だけはしてやりた——』と言つて、母親は低聲に成つて、『捨、お前はまた知らないだらう、明日は復た執達吏が來るさうだよ。』

親子は暫時無言であつた。

其時、姉が土藏の方から出て來た。岸本は斯の姉から財産差押のことを聞いた。

春

今、藏の内て、山田や幸平が道具の類を調べて居ることを聞いた。着類二行李は仁太が石町まで預けに行つたことを聞いた。

差押はこれで二度目である。母親は最早絶念めて、成るやうにしか成らないと考へて居る。

春

『捨さん。』と姉は物に製はれるやうな眼付をした。『私はもう、奈何でも可い。持つて行くものは、持たせてやる。』と言つて、深い溜息を吐いて、『宿では彼様いふ氣象でせう、家の者には何事も話かしてないんですもの、何處に奈何いふ金が借りて有るのかサツパリ解らない。』

最初の差押は、ある辯護士の爲に請人の判が押してあつたからで。それが解けてやれ嬉しやと思つて居ると、復た斯ういふ浪がやつて來た。精悍な大川端の叔母

春

の言草ではないが、岸本の母や姉は赤兒の手を振られるやうなものであつた。尤も一度浪をかぶつた經驗がある。其日は最初の時ほど周章でなかつた。其晩、仁太は大きな行李を隣の差配の家へ運んだ。

九十七

差押の光景を見るに忍びないやうな氣がして、翌朝早く岸本は三輪の家を出た。其日は兄に面會したいと思つて、復た鍛冶橋まで出掛けた。圖は二十番に當つた。

何のかんと言つても、岸本の家の者は民助を大切に、尊敬と同情を寄せ居た。斯の心は舊家の家長に對つて目下の者が持つ心であつた。で、獄中の不自由を思ひやるどころから、差入物は缺かさずする。辯護士も名高い人を選んで辯護料若干、無罪放免の曉には若干、斯ういふ約束で、石町の旦那から一人、親類から一人、家から一人、都合三人に依頼してあつた。民助の爲とあれば、家の者はいかなる奉公をも厭はなかつたのである。

無事な兄の顔を見て、岸本は家の方へ引返して行つた。門内に敷詰めてある砂利の上を踏んで、玄關前の葡萄棚の下まで行くと、見慣ぬ下駄が四五足脱いてある。未だ家の内は混雑して居る様子。玄關の次の間で、臺所の方から出て来る姉に出逢つた。姉は岸本の顔を見ると、先づ着物の袖で額の汗を拭いた。

「捨さん、到頭来ましたよ。」と姉は執達吏のことを言つて、「隠し立をなさいますと反つて御爲に成りません、私共は職務で参つたのですから、御話があるなら債権者の方へなすつて下さい。今日の執達吏は割合に溫和しい。そのかはり調べ方のキビしいこと、言つたら、壘を刺して見ないばかりサ。」

「へえ。」

「お前さんの本箱も押へられて了つた。」

「僕の書籍などは奈何でも可い。」

「着物を押へられるのが、何より私はツライ。」と言つて姉は嘆息して、「罪の無い子供の着物に手でも着けやうものなら、それこそ何とか言つて遣らうと思つて居た。お嬢様の物には手を着けません、これは別にして置きます。左様言ひま

したよ。』

『最早差押は済んだんですか。』

『ええ。執達吏は先刻に歸つた——未だ鬼は居ますよ。』

斯う言つて、姉は奥の方を指して見せた。つかくくと岸本は次の間へ行つた。縁側のところへ出ると、明けひろげた奥の座敷が見られる。そこには四五人の高利貸が集つて、何か密議を凝して居る。

『御親戚の方で何とか成りさうなものですなア。』斯様な言葉を残して置いて、聽て高利貸は歸つて行つた。夕方から家内の者は食事をする爲に集つたが、差押の張紙のしてないものは、唯飯を食ふ茶碗と、椀と、箸とだけであつた。岸本は大きなシメ膳に對つた。その膳の裏にも矢張張紙がしてあつた。

春

『母親さん、今日は鹽断ですか。』と岸本は飯をやり乍ら言つた。

『あい。』と母親は答へた。馬鈴薯に白砂糖を添へて、それを母親は菜にして食へて居る。斯うして身體を苦しめるのが子を思ふ母親の信心であつた。岸本がそれを心配しても、昔風の母親は聞入れなかつた。其日の混雑で、夕飯は例刻よりも遅かつたのである。三輪名物の蚊が襲つて來る頃には、物を食ふさへ熱苦しい。夕立が落ちて來た。

春

隣家の差配で、風呂を立てたから入りに来いと言はれて、岸本は汗を流しに行つた。歸つて見ると、母親は洋燈の下に左の足を投出し乍ら、しきりと灸をすゑて居る。毎日百度を踏む爲であらう、母親の足には水氣を持つて、押せば指の跡が残る程に腫れて居る。

春

『熱。』

と母親は顔を熱めて、燃え盡きやうとする火を打つた。新規な艾が復た其跡に盛られる。聴て線香の火が移る。斯うして左の足がいくらか軽くなつた頃、更に右の足を投出した。

斯の母親が子の爲にも百度を踏むのは、今度ばかりではなかつたのである。彼女

春

は郷里に居る頃、岸本の爲にも踏んだのである。彼が黙つて長旅に出たといふことは、何時傳はるともなく母親の耳に入つたのであつた。何程彼女が心を傷めたか、何程吾子の爲に無事を祈つたかといふとは、其晩岸本も聞いて始めて知つた。母親は足を押へながら、「捨、俺はお前に聞いて見たいことがある。』

『母親さん、何ですか。』と岸本は言つた。

其時母親の傍で蚊を追つて居た姉が談話を引取つた。『阿母さんは彼の法衣のことを言つてるんですよ。今日の差押で、篋筒の中から出て来たもんですから——』

『へえ、法衣も差押を食つたんですか。』と岸本は頭を擁へた。

『うつか一度彼の謂れを聞いて見たい。』

斯う母親は眞面目に言ひ出したが、岸本は笑に紛らして了つた。九歳に成る民助

の娘——愛子は最早姉の傍へ来て眠つた。

其晩はいかにも七月の夜らしかつた。山田と幸平は、仁太が御供で廊の方へ涼みに出掛ける。岸本は獨り玄關のところに寐轉んで、吉原の太鼓の音などを聞き乍ら、勝子のことを思ひつゞけた。夕立の通過ぎた後で、雫が暗い葡萄棚から落ちた。

春

『ア、、好い風が来る。』

と母親もそこへ来て寝轉んだ。

『捨、今夜は寝て話さまいか。』

斯う言ひ乍ら、母親は浴衣の裾で足を包んだ。親子は團扇をバタ／＼させた。その薄暗い、五疊ばかりの玄關へ、親子二人ざりて横に成つた時は、誰に遠慮があ

るではなし、親が勝手に欠伸をすれば、子は子で好きな方へ毛脛を投出した。

『何故母親さん達は出て来たんですか。もうすこし國に居る方が可かつたナア。』と岸本は思出したやうに。

春

『今に成つて見れば俺も左様思ふ。』と母親も考へる。『なにしろ、お前、東京の様子は解らないし、田舎の人は又、手紙でも来れば直に出掛けるものと思つて、彼方でも是方でも招んで呉れて、昨晩は隣家だつたから今夜は私共で使を上げる、お別れに手打の蕎麥でも食べておくんなしよや、愛様も連れて来てなんて、左様方々で言はれて見れば、一日も早く東京へ出たかつたよ。終には未だ岸本の女衆は出掛ない——何時行くすら、なんて言ふ人がある。それに田舎は口煩さい、やあ秋様は可愛さうだ、なんだあかんだあツて言ふもんだから、俺がお秋を連れて

留守居ばかりもして居られなかつたサ。最早も秋は兄さんに渡した、俺の役目は濟んだ、やれ一安心、と思つたのは未だ昨日のやうな氣がして居るのに——」
 急に、臺所の方で、誰か食べた物を吐瀉すやうな音がした。母親は身を起した。臺所に居るものは姉より外になかつた。姉の月經は出京する間もなく止つたのである。

春

九十九

翌日から、家の者は毎日のやうに額を集めた。庭の青梅も色づく頃で、仁木が長い竿を持つて行つて打落して來ると、姉はそれを箆に入れて、見ても酸っぱさうな果實をそこへ持出し乍ら、よく相談事の仲間入をした。

春

財産差押に次いで起つて來る黒雲は、公賣處分である。それは高利貸側の本意ではなかつた。彼等は民助の事件を長いと睨んだらしい。で、差押だけして置いて、一方では豫審の模様を窺ひ、一方では大將や親類から話のあるのを待つて居たらしかつた。家の方で、延期の金を工面して持つて行くと、彼等はそれを手数料として受け取る。それが不承知とあらば、元利耳を揃へて返濟せよと迫る。血の出るやうな金が斯うして幾度にも絞られた。

三輪の家で毎日岸本の眼に映る光景は、彼が今迄経験のないやうなことばかりで

有つた。監獄へ面會に行つて待合所で顔を見合せる人々、差入屋の亭主、制服を着た門番、それから暗い馬車に乗せられて裁判所の方へ送られる男女——いづれも彼には別の世界の人のやうに思はれた。次第に三輪の家へ出入する人も少くなつて來た。時折訪ねて來るものがあつても、頼みに成つて成らないやうな人が多い。例へば、周旋屋のなにがし。斯の人に買物を頼めば、頭をハチする位は平気でする人である。毎時來るのが十一時半頃と極つて居て、遠慮なく晝飯を食つて歸るので、『十一時三十分』といふ符牒に成つて居た。斯人の子息は風俗改良の方とやら。謂を聞けば、壯士俳優の見習をして居るとのことであつた。

八月に入つても、まだ豫審の終結しさうな模様はなかつた。山田は最早家に居なかつた。忠實な僕の仁太へも、給金のかはりに手車を呉れて、暇を出した。急に

家の内は寂しく成つて來た。兄の幸平は失意の人で、ブラ／＼して居る。母や姉は田舎から出て來たばかりである。そこで岸本は再び麴町の學校へ通ふことにして、家計を助けやうと思ひ立つた。

九月の新學期が始まる頃から、岸本の通ふ路は随分遠かつた。三輪から坂本迄、あの變化のない、平坦な道路だけでも可成ある。あれから上野の廣小路へ出て、切通坂を上つて、猿飴の角から斜に本郷の町々を通り過ぎる。神田川に添ふて飯田橋の方へ傾斜を下りる間は、最も彼が氣に入つた道路であつた。對岸にある樹木、小石川の方に續く町々の眺めは彼の眼を悦ばせた。九段へは、中坂から上る。富士見町、上六番町は、やがて彼を學校の方へ導いた。

春

勝子は夏休の前まで、一時學校の手傳として來て居て、普通科の生徒に何か教へて居たが、秋の學期の始まる頃から其手傳を辭した。許嫁の人の家は國館にある。結婚する爲にそこへ赴くのは、最早間も無いことのやうに傳へられる。長く都にとどまるといふことは、彼女の父が許さなかつたのであらう。

岸本と勝子の不思議な關係が、何時までも學校の人の噂に上らずには居なかつた。得たり賢しと言觸すものがある。年をとつた生徒の眼は皆な笑つた。あの先生は

百

文章が書けるから、必と其様なことで迷はしたのであらうなど、また年のいかない生徒まで言つた。家さへ困らなければ、斯様なところへ教へには來ない、斯う岸本は腹立しく思つた。自然と彼の態度は固くなる。彼が教場へ入つて來る其様子がいかにも可笑しいといふので、早速生徒は彼に「蟹の横這」といふ綽名を付けた。

春

439

教員室の前にある廊下のところは、寄宿舎から教場への通路であつた。何かある度にそこへ掲示される。時間表もそこに貼付けてある。生徒はよくそこを往つたり來たりした。ある日、岸本が扉に倚つて立つて居ると、勝子は妹の豐子と肩を組ませて、何氣なく彼の前を通り過ぎた。その無言な、姉さんらしい様子の人を眼前に見て、彼はまた勝子が都に居るといふことを知つた。

それは東洋の大機といふやうな言葉が繰返される頃のとてあつた。その月の十三日には最早大本營は廣島にあつた。平壤の戦は既に戦はれた。日英新條約の報も傳はつた。日々の新聞は殆ど戦争の記事で満たされる。それを讀んで發狂する人さへある。文筆に従事する人々、畫家なども多く従軍した。

勝子の出發はその月の下旬であつた。彼女は父と共に一旦歸國して、それから津輕海峡を渡ることになつた。暇乞の爲に學校まで出て來た日は、丁度背も居た。岸本は其頃、亡くなつた友達の遺稿を編まうとして、いろく雑誌を集めたり、青木の未亡人から借受けたものを調べたりして、其仕事を心に描いて居る時であつた。其日も、奈何青木の反古を取捨しやう、奈何いろ順序に友達の形見を並べやうなどと考へ乍ら、教員室を出て廊下を突當らうとすると、ふと圖書室の戸

口のところで勝子に出逢つた。

勝子は岸本が自分の前へ來るまで遠慮して立つて居た。圖書室の机のところには四五人の生徒があつた。

『先生、いろく御世話様に成りました……』

斯う言つて、勝子は紅く泣腫れた顔を上げた。彼女はまた何か言はうとしたが、それを言ふことは出来なかつた。

岸本は黙つて、御辭儀をして、別れた。

春

二三日経つて、岸本が學校へ出て来て見ると、勝子の妹は午前だけ見えなかつた。姪にあたる人も同じやうに休んだ。

斯の人々の缺席は、勝子が盛岡へ向けて發つといふことをそれとなく岸本に語つた。其日は氣紛れな風が吹て來たかと思ふと、バツタリ忘れたやうに静まつて了やうな日であつた。裏庭の垣根に咲き残つて居た朝顔も最早小さく見えた。岸本は一日學校で暮して、懸て課業の終る頃、菅と二人ざり教員室に残つた。

『號外く。』

と呼ぶ聲は、振り鳴らす鈴の音と一緒に、時々往來の方で聞える。それを聞くと

斯う静止して居られないやうな、悲壯な感想を人の心に起させる。

『君には未だ話さなかつたね。』と菅は友達の顔を熟視り乍ら、『ひよつとすると、僕は戦地へ行つちまうかも知れないよ。』

斯いふ菅の眼には不思議な輝きがあつた。彼はある新聞社の知己を通して、通信員として出掛けたいと思ひ立つた。斯の友達の急遽な思ひ立が岸本の胸を打つた。

『菅君は戦地へ行つて、もう歸つて來ない積りぢやないか。』斯様な風に思はれる。

學校の門を出て、岸本は友達と別れた。彼は菅のことを考へ乍ら歩いた。ふと、朝顔の纏ひ付いた垣根が彼の胸に浮ぶ。縁側がある。部屋がある。書棚の側にはサツパリとした浴衣を着た足立が居る。地味な紵を着た菅が居る。足立の母親が

春

春

居る。自分も居る。それは岸本がよく出掛て行つて、種々な談話をしたり、日記などを見せて貰つたりした足立の寓居である。母親の前にある帯地の類は、菅が箱根に居る人の爲に見立て、貰つたので、それを自分にも見せて、『君はどれが可い』と選ばせたことを思ひ浮べた。家の方の故障で、事は破れても、足立に託して彼様いふ物を贈らうとする菅の情は清く又哀である。まだそれは足立の家の庭の朝顔が盛に咲いて居た頃のことである。斯う岸本は思ひ浮べた。歩き／＼彼は友達のことを考へたが、あの切ない思と、従軍の志望とを別々に離して考へることは出来なかつた。

富士見町の通まで行くと、納草紙屋の前には、男女が集つて、血腥い戦争畫を争つて見て居た。

『北京へ。北京へ。』

と往來する人々の眼が言ふやうに見えた。街火を焚いて祝ふのは何の日だ、それは怒つた肩が言つた。水を打つたやうに静まり返つた、眞剣な眼付をした歩兵の一隊は、靴音を揃へて、熱狂した傍觀者の前を通り過ぎた。その靴音が遠く聞える頃に、また他の靴音が近いた。岸本は其間を通り抜けた。彼は青木の遺稿を編む爲に家を指して歸つて行つた。

春

春

『秋風蕭條の記。日清の戦争に世は武士のものとなりぬ。市川學窓に古賢を友とし、岸本僅かに餘喘を保ち、菅また悄然、ひとり足立の意氣軒昂たるは奈何なるまぎれにや、風の便りに聞けば隣家の庭に野花一輪の咲出でしなりといふ。』
斯様なことを菅が書いてから、一年ばかり過ぎた。

明治二十八年の十一月に成つた。支那の俘虜を満載したガタ馬車が幾臺となく東京の市街を通つたのも、最早二月程前のことである。その隣國の兵士等が馬車の窓から手を振つて、歸郷の喜悦を示した時、こちらも同じやうに歡呼を揚げた群集は、今、平和を祝ひ乍ら歩いて居る。其年の地方の收穫は平作以上に豫想される。本郷切通の坂を往來する人々の顔にも何となく喜悦の色がある。土の上には

春

影が動いて居る。日は坂の上の空氣と塵埃とを照して居る。勝手の道具や、柳行李や、それから大きな風呂敷包などを積み載せた荷車の後に隨いて、丁度上野の方から坂へかゝつた人力車がある。荷車は右へとり左へとりし乍ら、本郷臺へ向つて上つて行つた。人力車も徐々隨いて上つた。車の上の人は萬感こもく胸に追るといふ風で、人目も憚らず男泣に泣いて、傍へ來て何か手付をして見せた立ン坊のあるにも氣が着かずに居た。

斯の男が岸本である。彼は今、三輪を引拂つて、湯島に見つけて置いた新しい住居の方へ移らうとする途中である。

坂の中央で岸本は麴町の學校の生徒に逢つた。生徒は彼の顔を不思議さうに見て、意味もなく笑つて、應て挨拶し乍ら車の側を急いで行つた。

春

過ぐる一年は、岸本に取つて忘れることの出来ないほど艱難な年であつた。其間に彼の母親は乳瘤を煩つて、病院へ入つた。手術を施して間もなく愈るには愈つたが、彼を養つた乳房は其爲に袋ごと抜き取られた。母親の胸のところには最早片方しか垂れて居なかつた。其間には又、年老た伯父が郷里から出京して、家の整理をする爲に逗留して居て呉れた。伯父は半年程三輪に居た。正直で氣短な性質から、よく家の者と衝突した。終には『最早オマイタアの許へは、奈何な事があつても出て来ないぞ、』と入歯を動かして乍ら怒つて歸つて行つた。斯の伯父の居る頃、姉は愛らしい男の兒を産落した。脚氣の乳を吞ませたとやらで、生れる間もなく其兒は亡くなつた。幼い遺骸は隣の寺の墓地をかりて、芭蕉の樹の蔭へ埋めた。脊に腹はかへられなつた。諸方から集つて來た香典は大抵家の者が食つて了つた。

春

そればかりではない。差押へられた財産は何時までも張紙の儘で居なかつた。岸本の家は到頭破産の運命に逢つたのである。母親が丹誠して織つた衣類などは多く其時に失つた。それでも無くて叶はぬ日用の道具は、公賣の當日、知合の道具屋に頼んで買戻して貰つたので、其が今荷車に乗せて運ばれて行くのである。湯島の家は俗に大根島と稱へるところに在つた。岸本が荷車と一緒に着いた頃は母も、姉も、幸平兄も、それから愛子も、皆な最早新しい住居に移つて居た。

春

大根畑は麴の香のする町で、上麴、白米と記した表障子、日あたりの好い往來の側に乾並べた桶、軒下に積重ねた松薪などの見られる場處である。そこは湯島四丁目の浅い谷を経て、神田明神の杜を望むやうな位置にある。

「捨叔父さん。」

斯う愛子が呼んで、荷物と一緒に着いた岸本の傍を通り過ぎた。仁太の居る頃には車で學校通をする程大切にされた娘も、今は豆腐を買ひに遣らせられるといふ境涯にある。愛子は前垂の下に味噌澁を隠して、可差しさうに驅けて行つた。

三輪から持つて來た道具は新しい住居に似着かなかつた。銅壺の附いた長火鉢は

春

中央の部屋の隅に据ゑられたが、斯の借屋で見ると可笑しいほど大きかつた。とは言へ、家内一同が其長火鉢の周圍へ集まつて、食事をしながら互に顔を見合せた時は、何となく自分等の巢らしい處へ移つて來たやうに感ぜられた。快活な母親の笑ひ聲は、急に際立つて高く聞えた。どうかすると狭い往來へ響き渡つた。都會の婦女のやうな低い優しい聲を田舎者に出せと言ふ方が無理だ、斯う言つて母親は笑つて居たが、それでも出京の當時に比べると餘程低く優しくなつたのである。第一、近所迷惑だ。そこへ母親も氣が付いて來た。

不幸にも、民助はまだ歸るとが出来なかつた。姉は夫の身の上を案じ煩つて、時々茫然と考へ込む。「姉さん、穴が明ますよ。」とよく岸本が長火鉢の側を撫てたものである。

寄ると觸ると、家の者は民助の噂をした。公判は其年の八月にあつたが、可恥しい服装もさせたくない、と姉が言つて、黒絹の紋付羽織を差入れた。それを着て編笠を冠つて、裁判所の廊下のところへ引かれて来た兄の有様は、また岸本の眼前にある。廊下の両側には、石町の大將、大川端の叔父、それから視類知己の人々などが並んで立つて居た。民助は黙禮して其間を通り過ぎた。法廷に立つた民助の後姿は、他の囚人のやうにワルビレたものではなかつた。兄はどこまでも情の人である。假令法律上有罪の宣告を受けても、猶弟等は兄の爲に哭き、兄の爲に辯解をしたいと思つて居る。間もなく民助は控訴をした。その裁判はまだ開かれずにあつた。

二階が一間あつた。そこを岸本は自分の部屋にした。彼自身の上から言つても、

過る一年の間には種々な苦い經驗をした。又可恐しい打撃を受けた。打撃といふは他でもない——勝子の死である。

勝子の死が岸本の耳に入つたのは、二月程前のことであつた。岡見兄弟は早く報知を受取つて居たのであるが、岸本へは話さずに置かうといふので、知らせなかつた。夏休の終る頃、麴町の學校へ寄つた時、岸本は寄宿舎の舎監から始めて其

春

話を聞いた。「安井さんのことを御存じですか。」と舎監が勝子の姓を言つて尋ねるから、「いゝえ、」と岸本の方で答へると、舎監は「最早御忘れに成つたかも知れませんが、」と言つたやうな調子で、それとなく岸本の顔を眺めて、「安井お勝さんといふ生徒が御座いましたらう——彼人も亡くなりましたよ、」と種々な人の噂をする序に言出した。それを聞いた時は、思はず岸本も紅くなつた。他の生徒とは違つて、妙に勝子のことは尋ねにくい。何日亡くなつたか、奈何して亡くなつたかとは、確めかねたのである。その歸途には、地が隆く持上つたり、空が黄色く成つたり、そこいらに在る物の象がグロ／＼搖いて見えたりした。

秋の學報を手取るまでは、それが事實とも思はれなかつた。大川端へ出掛けて薬研堀の縁日を見に行つた夜などは全く夢のやうである。灯と、煙と、草の香の

春

なかに、新婚の人々が私語を聞いた時、思はず岸本は胸を踊らせた。勝子は斯世に生きて居る。としか彼には考へられなかつた。

學報は岸本の夢を破つた。

學報曰く、「八月十三日、麻生勝子氏忽然永眠せらる。其數日前來着の書狀には、差したることもなしと有りしに、俄の事として人皆驚かざるはなし。勝子氏永眠の報あるや、直に校長より弔辭を送られ、又、その葬式場へ向けて左の電報を發せられぬ。式場にて教師某氏より披露ありしと。マメヤカニテマコトアリサイアリシカツコヲウシナヒフカクヲシム。

「其後、兄安井氏、父なる安井氏、來校せられ、厚く生前の謝辭を述べられたり。又、麻生氏より禮狀ありて、勝子生前學校負債のことをいたく憂ひ、家計を節し

て貯蓄し、僅かづ、預けありしものごととて、金六圓寄贈せられたり。』

勝子の姉から關根校長へ宛た手紙には、委しく彼の女の臨終の光景が述べてある。

『七月二十四日、當地へ安着いたし。』と姉が書いた。翌二十五日、勝子を訪問し病狀相尋ねいところ、別段心配するほどには相見え申さず。妊娠の有無を尋ねいところ、いまだとの事故、養生の注意を加へ歸宅いたし。其後、兩三度尋ねいへども、いつもく追々快方とのみ申し居り、且顔の色なども至つて鮮やかにて、病人とは見え申さず。されど終日病床を離れずとの事ゆゑ、こゝろひそかに心配いたせしのみ。八月六日、召使ひのものに手紙を持たせ、氣分よければ人力車にて遊びに參るべきやう申しつかはしいところ、兩三日中に徒歩にて靜かに來るとの返事ゆゑ、心待に待ちしところ、九日の午前九時頃、麻生より使

春

ひにて、勝子病氣惡き故直に來るべしとの報に驚き、使ひの者に尋ねたるも一向に要領を得ず。早速參りい。

『勝子は眼の色かはり、姿も心も平常とちがひ、小兒のごとく無邪氣なるとのみ申し居りゆゑ、あまりのどに胸つぶれ、悲しみ満ちて涙も出でずいひき。病院長も參り診察いたしいところ、案外にも覺束なしとの答、奈何して斯くまで變化の速かなること、院長に尋ねいへども、妊娠のため——ツワリとかと烈しく、自然に體の弱りしたため心臟病を引起せしとのことに有之、それに神經の鋭敏なるため六ツかしきよし申されい。

春

『此上は逆も人力の及ぶところに無之、神の攝理に任せいより外なしと、心ひそかに祈りい。其日は唯小兒の如く、種々餘念なき物語して、夜も靜かに寝ねい由。

春

翌十日、朝、参りしところ、よく眠り居りしゆゑ、兄と私とにて勝子の両手を
 持ち添へ居りたるに、目を覺まし、兩人の手を強く握り、嬉しとていたく泣きし
 ゆゑ、互ひになぐさめて眠に就け申しし。俄然目さめては、コレラにつかれしゆ
 ゑ人々去り給へ、神様と共に居れば淋しくない、看病うけても死ぬる時は死に、
 生きる時は全快します、オ、神よ我を助け給へ、など申せしが、また静かに成り
 たる時は、相變らず麻生が親切咄を人々に吹聴すること、自身死後——後妻の
 周旋など氣遣ひ、兄姉に依頼するなど、暫時も麻生を傍より離さずしひし。十一
 日は、私小兒病氣のため、心ならずも見舞かね、召使に兩三度模様を尋ねしと
 ころ、同日午後より無言に相成しとの音信ゆゑ、十二日午後、病兒を召使に託
 し、三時頃参りたるに、とんと容體變り、唯々呼吸するの外、いと哀の姿に成り

春

熱度烈しく、斷えず氷にて頭を冷し居りし。八時頃、俄に閉ぢられし舌ほどけて
 二言三言——それは最後の言葉と、後になりて思ひ申しし。
 『終夜看病いたし、十三日、午前、四時頃スープならびに牛乳等を食し、心地よ
 く寝ねしゆゑ、脈を調べたるに前日とは大違にて、よく調子揃ひ居りし。素人の
 悲しさ、病軽く相成しこと、兄と共に喜び、兄は母の旅行を心配して歸宅——
 國元母に危篤の電報せしところ、翌日出立せしと報知ありしに、豫定より二日後
 れ來着なきゆゑ、問合中——それより十分ばかりも經ちし時、スヤ／＼眠る顔の
 いつもに違ひしやうに思はれ、勝子々々と呼びしところ、大きく丸き目を見開き
 ニコリと笑ひ、何か物言ひたげに口動かしながら呼吸一時に止り、私の顔を見つ
 七時半頃……』

『母は勝子永眠後、一時三十分ほどに着いたし。……勝子永眠後、麻生の悲歎失望、極に達し、實に哀れにて氣の毒に御座い。毎日々々の墓參、世を味氣なく思ひなし病氣など引起し申さずばよきと、心痛いたし居りい。』

百五

『苟くも何事か爲やうといふ男兒が女子の一人や二人位葬つたつて何だ。』とは市川が元箱根の宿で岸本を激勵ました言葉である。岸本は今、あの友達の言葉を借

りて、自分で自分を激勵せよと居る。『何だ、これしさの事に。』と言乍らも、何時の間にか彼は茫然考へ込むやうな人に成つて居る。友達仲間は彼の爲に心配した。殊に年長の足立は、勝子が結婚の當時、長い手紙を寄せて、『そんなことに弱つて奈何する、』と勵ましたり、『君はあまり自分を責め過る、』と教へたり、逢へば又、『む、大分飄逸なところが出来た、』と言つて見せたりして、もうすこし別な心の持ちやうも有りさうなものだ、世間を見よと忠告して呉れる。それは岸本も心に感謝して居る。奈何せん、彼には自分で自分の自由に成らないやうなところが有つた。自分は弱つて居ない積りでも、左様は許して置かないやうなものが有つた。『三輪の隠居』など、笑はれて、憤慨する傍から、恰も彼は喪心した人のやうに成つて居たのである。

斯ういふ岸本は、勝子の死を聞いて、餘計に沈んで了つた。どうかすると、働く氣も何もなくなつて了ふとが有つた。時々彼は身の邊を眺め廻した。母がある、姉がある、不幸な兄がある、愛子がある。彼が働かなければ、斯ういふ人々は食ふにすら困つて来る。そこで心を取直して、兩手で自分の顔を紅くなるほど摩つて、また錢取に出掛ける氣に成る。

湯島に移つてから、麴町の學校へ通ふのは餘程樂に成つた。舊の人が居た場所と思へば、その建物も可憐しい。教員室の壁のところには、毎年の卒業生の寫眞がある。それが額に入れて、並べて懸けてある。白い、冷い壁も、背景として似つかしく見える。よく岸本は其額の前に立つた。

今は生徒も若い人の時代は成つて來た。ある日、岸本は食堂で辨當をつかつて、

それから廣い講堂を通らうとすると、玻璃窓の外には多勢生徒が集つて、思ひ思ひに晝休の時を送つて居る。打球の音も靜かに聞える。窓のところには二三の生徒が倚凭つて庭の方を眺めて居る。立紵の紬を着て、その後立つ人は豊子である。豊子の着て居るものは、曾て可憐しい人の身に纏ふたものである。其時、豊子は岸本の姿を見つけて、彼の傍へ微笑み乍ら近いた。

春
『先生。』

と親しげに言つて、やがて袂の中から書いた物を取出した。それは『懷舊』といふ題で、亡くなつた姉を悼んだ文章であつた。

『先生、何卒これをお直しなすつて下さい。』

といふ豊子の可憐な眼付には、何處かに姉を思出させるところが有る。『何と思つ

て、斯様なものを自分の許へ持つて來たらう。『斯う岸本は推量して、未だ何事も知らずに居るやうな、無邪氣な娘の顔を眺めた。彼は自分の妹の顔を眺るやうな気がした。』

百六

ます／＼岸本は無口な人に成るばかりで有つた。口で言へないことは、せめて文章に書いて表白せうとした。彼は種々な文體を試みた。小説、戯曲、論文、それ

から新體詩までも試みた。一つとして自由に表白せるものは無かつた。

其年の十二月、脚氣で弱つて居る姉を連れて、岸本は上總の方へ旅行した。横濱から便船で富津へ着いて、小久保といふ漁村に姉を残して置いて、房州小湊にある日蓮の生地を見る爲に鹿野山を越えた。石塊の多い山道で、崖の下には谷川の流があつた。其時、彼は路傍の石塊を拾つて、崖の上から落してやつた。其様なこととて自分の一生の方向を卜はうとしたこともあつた。もし石塊が河の中へ落ちるやうであつたら、文藝の道路を進まう。途中で止るやうであつたら、全く方向を變へて、他の職業の中に埋没して了はう。斯う思ひ迷つた。石塊はごろ／＼轉つて落ちて行つたが、一つは河を越して向へ落ち、一つは河の中へ落ち、一つは河まで行かずに手前で止つた。結局奈何して可いか解らなかつた。

春

富津から歸路の舟には又、忘れ難いことがあつた。赤黒く日に焼けた船頭の親子が巖盤な腕に力を籠めて、勇しい掛聲なんかで櫓を押した。それを見た岸本はいかにも男性らしい氣魄と精力とを感じた。而して、自己を顧みて、可恥しく思つた。自分も一つ斯の船頭の親子のやうに、全力を出して事業をして見たい。斯う可羨しく思はないではなかつたが、奈何しても彼には全力を出すといふ氣に成れなかつた。猛然として、其實意氣沮喪しながら歸つて來た。

彼是するうちに、其年も暮れた。足立は二十八、菅は二十七、岸本は二十五、市川は二十四、福富は二十三に成つた。岡見はとつくに三十を越えた。

復たく柳の條から黄色い花の落ちる時節が來た。

三月の下旬には、岡見は磁子を迎へて、一緒に大磯に籠つた。

春

長いこと病床に横はつて居た森下も到頭不歸の客と成つた。この少壯な宗教家は遺精病とやらで死んだ。

檢定試験に合格した足立は、ある地方の中學から聘せられて、遠からず任地を指して赴くといふ。しばらく岸本は連中に逢はなかつたので、先づ足立を訪ねる積りて大根島の家を出た。例の出格子の窓のある寓居には、自筆で足立弓夫といふ表札が出てある。入口の格子のところ立つて、訪ねると、足立の母親が出て挨拶した。生憎友達は居なかつた。

多分池の端であらう。斯う思ひ乍ら、岸本はある邸の塀について無縁坂を下りた。不忍の池が見える。

百七

春

池の端と言へば、飛んでも行きたい場所のやうに以前には思はれて居たが、次第に岸本の足は進まなくなつて來た。行つても話が出来ない。話が出来ないから面白くない。毎時黙つて引下がつて來る。『君は寄席でも聞いて見たら可からう。』など言つて菅が笑つたのは、あまりに岸本が沈んで了つたからで。

『——菅君といふものは、めつさり男をあげたよ。』

斯う市川が相變らざる調子で言つて、大學から出る雑誌を展げて居るところへ、

丁度岸本が訪ねて行つた。

春

戦争の當時、從軍したいと言つて居た菅が、話の纏まる頃には最早平和の世であつた。彼は試験に合格して、今は大學の選科に居る。そこで英吉利文學を研究して居る。高等學校の制服を着けて居た連中も、今は角帽に金釦といふ姿で、各自志す方へと向ひつゝある。福富は文科、栗田は醫科、岡見の弟は工科を擇んだ。市川は福富と一緒に進むべき人ではあるが、一時日科を放擲した位で、高等學校を卒へずに退いた。彼は別の方角を取つて、福富や菅と歩調を合せやうとして居る。

『機運遂に止むべからず。』

と言ひ乍ら、市川は手に持つた雑誌を繰つて見て、やがて福富が書いた文章の一

節を節面白く讀んだ。

『ピウス二世が法王の位に上らざりし時、其甥に送るうちに、「少年の時はめでたきものなり、人生の五月も歡ばしきものなり、されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし』』

市川は岸本の顔を眺めて、味深さうに、其文句を繰返した。

春

『されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし——は、は、は。』

僕は矢張斯の主義だ。

昔は市川に同意を表した。『岸本君の旗色は、どうもすこし鮮明でないやうだネ。』
と言はれて、岸本は頭を垂れた。彼は何か言はうとしてグツと詰つて了つた。唯彼は肩を揺つて居た。

『しかし、皆なが皆な同じやうに成らなくツても可からう。一人位は遊んでる者が有つても可からう。』
到頭斯様な風に言出した。

春

『そんなら其で可いサ。』と市川は岸本の方へ頭を突出して笑つた。『左様いふ意氣込が有るなら、また頼母しろ。』

岸本はまた無言に返つて、深く思ひ沈んで居る。

聰慧い市川に言はせると、今は奈何いふ時世であるかを考へねばならぬ。十年二十年の後に成つても、見られるか奈何か解らないやうな青年の夢を、今が今見やうとしたところで、左様は世間が許さない。それよりは靜かに學問でもして、傍ら藝術を樂まうてはないか。それが遙かに高尚な生涯ではないか。斯う岸本に説

さ聞かせた。

昔は諺語半分に、

『君は彼の時分に死んでた方が可つたよ。』と笑つて、舊からの學校友達を憐むやうな眼付をした。『彼の時分』とは岸本が旅に居た頃のことである。

春

百八

『青木君が生きてたら、今頃は何を爲てるだらう。』と市川は四方八方な雑談を續

けた。

『さあ。』と昔は受て、『何を爲てるだらう。新聞でもやつてやしないか——しきりに新聞をやつて見たいッて、左様言つて居たから子。』

『それとも、ずつと芝居の方か。』と市川が言ふ。

『ちよつと先生も困るだらうよ。』と昔は考へて、聽て氣を變へて『足立君はあまり先生には感服して居ないんださうだ。』

岸本は黙つて二人の談話を聞いて居たが、急に其時眼を瞑つた。彼はある物の閃光に觸れたやうな眼付をした。而して何か思出したやうに、嘆息した。

『左様かなあ。』

と彼は獨語のやうに言つて居た。

春

床の間に立掛けてあるシエレイの畫像も、今は以前程の興味を引かないといふ風で、何となく後の方へ沈んだやうに見える。亂れた髪の毛、大きな眼、開け展げた胸のあたり、畫としての缺點が眼に着く。畫像は例の首を傾げて、三人の談話を聞いて居るかのやうにも見える。

春

「福富君は矢張文藝復興期の研究ですか。」と岸本が聞いて見た。

「福富君？」菅の眼は輝いた。「最早其様なところは通り越して居らあね。」

「へえ。」と岸本は問の抜けた調子で、「何を先生は研究してゐるんですか。」

「ずつと希臘サ。」と菅が答へた。

斯様な調子で、岸本は他の友達に置いて行かれるやうな気がした。皆な自分のやうに愚圖々々しては居ないと思つた。それでも彼は以前と同じやうな心地に返り

春

たいと思つて、話頭を戀愛の問題へ向けて見る。

菅は最早其様な話に飽き〜したといふ風であつた。「未だラブの話か。」と彼は面を振めた。「ラブなんてものは、其様に大騒ぎする程のものぢやないんだ子——畢竟、飯を食ふやうなものサ。」

『は〜は〜』

と市川は返返つて笑つた。

其時菅は、早く眼が覺めて可かつたと言つたやうな顔付をした。彼の眼前には、何時までも同じ悲哀に屈託した、醉生夢死して行くやうな舊の友達が、頭を垂れて思ひ沈んで居た。一度剃られたといふ髪は復た長く延びて、蒼白い額のところ

あんなに可愛らしい餅菓子

に垂下つて居る。その岸本の姿を眺めると、菅は空想家の末路を見るやうな思が

した。

市川は笑つて、『世の中のは、太くて短いとか、細くて長いとかサ、まあ其二つなんだけれど、岸本君のは——』と言ひかけて、急に菅の方を見て、『菅君のは太く短い方だつたね。』

春

『他の事はかり言つてらあ。』と菅も笑つて、『左様いふ君のは、何だい。』
 『僕か子。まあ細く長い方だらうよ。は、は、は。』

百九

其時菅は白い袱紗に包んだ物を取出した。それは岸本が西京の峰子から贈られたといふ懐劔であつた。

『二三日前に木挽町へ寄つたら、斯様なものが出て来たよ。』と言つて、菅は微笑んで、『随分長く預かつてた子——最早これは返しても可からう。』

春

とその預りの品を友達の方へ押遣つた。漂泊の紀念は斯うして再び岸本の手に戻つたのである。それは岸本が鎌倉から出て来て八戸の方へ發たうとした當時、木挽町の家で菅に預かつて貰つたものである。

『奈何だね、これから堤さんの許へ出掛けて見ないか。足立君も行つてるかも知れないよ。』

斯う昔が言出した。

よく女の方力で支へられて居る家庭が世の中には有る。左様いふ家庭には、よし男が有つても意氣地が無いとか、働が無いとかで、氣象のしやんとした人は反つて女の方に見受けられる。堤の家も矢張左様いふ風のところであつた。そこには堤姉妹が年老いた母親にかしづいて、佗しい、風雅な女暮しをして居た。いづれも苦勞した、談話の面白い人達であつたが、殊に姉は和歌から小説に入つて、既に一家を成して居た。この人を世に紹介したのは連中の雜誌で、日頃親しくするところから、よく市川や足立や昔がその家を訪ねたものである。で、其日も昔は岸本を誘つて、市川と三人連で出掛けやうと思つた。飄逸な、心の置けない堤姉妹の家ですら、岸本は黙つて、皆々の談話を聞いて

春

歸るばかりである。何處へ行くのも氣が進まなかつた。

『まあ僕は止さう。』と彼は言つた。

『そんなことを言はないで、一緒に行つて見給へナ。』

と昔がしきりに勸めたが、到頭岸本は行く氣に成らなかつた。

市川は起つて帽子を冠つた。

『もう少許からツとした事は有ませんかねえ。』

と彼は堤の姉の言つた言葉を繰返した。間もなく三人は一緒に斯の宿を出た。

不忍の池の畔で友達と別れて、岸本は獨り大根畠の方へ歸つて行つた。途次彼は友達の言つたことを思ひ浮べた。而して、互ひに若い生命の萌出した時分には、同じやうな氣分で居たともあつたが、梅は梅、柳は柳、といふ風に、最早別れ

春

の人に成つて行くのであらうかと考へた時は哀しかつた。三月下旬とは言ひ乍ら其日は寒い日であつた。ポツ／＼落ちて來た。

春

百十

濡れ鼠のやうに成つて、岸本は大根島の家に近い。突にても變るかと思はれるやうな、寒い、冷い雨に打たれたので、帽子と言はず、羽織と言はず、全身は筆である。格子戸の内に駆け込んで庭の處に立つと、母親が直に見つけて飛んで來

た。母親は岸本を後向に立たせて、乾いた手拭で羽織を拭いて呉れる。泥に成つた足袋もそこへ脱ぎ捨てさせる。

「お前、足を洗はなくても可いかい。」と母親は吾子の姿を眺め乍ら尋ねる。

「捨さん、水を進げませうか。」と姉は臺所の方から聲を掛けた。

岸本は着物を脱ぎ更へたり、雨に濡れた顔を拭いたりしたが、さあ身体は蒸々する、手は熱る、額のところからは汗が湧くやうに流れ落ちた。

「母親さん、濟みませんが飲む水を下さい。」

と岸本は長火鉢の傍に坐り乍ら言つた。母親は岸本の爲に冷水を汲んで來た。その薄紫色の水呑コップも豪華な三輪時代の形見である。岸本は目の醒めるやうな汲立の冷い水を舌打して飲んで、漸く渴いた咽喉を潤した。

春

雨が降り込むので、表に向いた部屋の戸は閉めてあつた。幸平兄はその暗い壁に近く寝轉んで居る。愛子はその側で餘念もなく手毬をついて居る。

「オ、捨さん、お歸りか。」

と幸平はすこし身を起こして言つて、復た仰向に寝轉んで了つた。斯の失意な、不平な兄は、最早働かうといふ氣がなかつた。たゞく弟の食はせて呉れるに任せて、一生を運命の弄ぶまゝにして居る。

春

「母親さん、僕は最早麴町の學校を辭めやうと思ひます。今日菅さんの許へ行って、つくづく左様思ひました。斯様に愚圖々々して居たつて仕方が有りません。」斯う決心の籠つた調子で言つて、岸本は母親の顔を仰いだ。

「あれ、左様かい。」と母親は心配さうに考へる。

「そのかはり是から筆の方で稼ぎます。」

「稼げるかしら——」

「今迄は學校が有りましたから、それで反つて物が書けなかつたんです。學校を辭めて、奈何しても稼がなけりや成らないとなつたら、必と書けます。」と言つて岸本は不安な眼付をして、「さあ、僕も是から友達に笑はれないやうに行るぞ」

春

母親はたゞく岸本を頼りにして、末の子と一緒に住むといふことを楽しんで居たのである。その子が今、奈何いふ精神の状態にあるか、筆の方で何程の錢取が出るものか、左様いふことには一向暗かつた。

雨は突に變つたと見えて、蕭々降りそゞ音がする。青白い光は、雨に濡れた表の格子戸を通して、斯の屋の内を薄暗く淋しく見せる。しばらく岸本は冷たい壁に

倚凭つて、鑿の音を聞いて居たが、やがて思ひついたやうに斯様なことを言出した。

『母親さんは奈何いふ積りて僕のやうな人間を造へたんですか。』

母親は長火鉢の灰をならし乍ら、苦笑した。

『左様いふことを聞くのは、一番親不孝な言葉ださうだ。』

春

百十一

ブラ／＼して日を暮して居る幸平兄に言はせると、斯の家屋の下は——恐らく廻室にでも成つて居るので有らうとのことであつた。どうも物の音が響き過ぎる。よく晝寝をする幸平は斯様なことを考へ出した。是は岸本も氣が付かずに居た。して見ると、田舎者の聲が高いばかりでもない。早速姉は母親を辯護したのである。

春

鑿の止んだ頃、岸本は二階へ上つて、窓の戸を開けた。狭い、ごちやくした町中のとて、向側に並ぶしもた屋、仕立物の看板を懸けた家、姪婦預所、厚焼せんべい、又は子供を相手に瓜、豆、駄菓子其他粗末な玩具の類を置く家々などが見られる。その濡れた屋根の上に、雨降揚句の空を望むことが出来る。一方には未だ暗い雲があつたが、神田明神の方角はすこし晴れて、黄ばんだ灰色の、影の

深い横雲が遠く懸つて居た。

午後の光は岸本の勉強部屋を薄明るく見せた。尤も廂の浅い二階建て、天氣の好い日には逆上せるほど明るかつた。勉強するには、日が射し過ぎる位で、その爲に直に倦み易くも思はれた。粗い灰色の壁には、父の遺筆が紙表具にして掛けてある。その隅に本箱が置いてある。岸本はその本箱の引出をあけて、例の懐剣を底の方に藏つて置いた。

春

麴町の學校は、懇意な人々の經營して居る事業で、それを辭めるにしても別に辭表などを出す必要はなかつた。机の上には愛讀の書物が積重ねてある。其中には勝子の墓に咲いたといふ花が押されて入つて居る。それは關根が函館土産に贈つて呉れたものである。書籍を開けて、偶然其様なところが出ると、また岸本は考

春

へる、人情から受けた深傷を癒すものは人情より外に無かつた。彼は勝子のことを忘れやうとして、何時の間にかさまぐの女に思をかけて居た。左様いふ場合は後から起つて来る。直に最前の人には忘れて了ふ。馬鹿らしい彼の眼には、幻のやうな女の影が映つたり滅えたりして居た。

『製作、製作。』

これが自分を無理無體に押出さうとする心の底の聲である。

日暮に近い頃、岸本は階下へ降りた。臺所には姉が腰を曲めて、夕飯の仕度に急がしかつた。母親はセッセと腰節をかい居た。暫時岸本は眺めて立つて居たが、やがて母親の方へ自分の脊中を向けて、

『母親さん、僕の脊中を思ふさま一打つて見て下さい。』

と笑ひ乍ら、前曲みに成つて言つた。

『斯うかい。』

と笑つて母親は右の手を揚げやうとした。急に手の筋が釣つて來た。乳瘤の療治をしてから、時々母親は斯ういふことが有る。

『どれ、私が母親さんのかはりに打つて進げる。』と姉が笑ひ乍ら言つた。

『斯う思ふさま眼の覺めるやうなやつを——』と岸本は姉の方へ脊中を向けた。

『奈何に強くても宜う御座んすか。』

『え、姉さんの力なら——』

姉は白い、細い手を揚げて、力一ぱいに弟の脊中をドヤした。

春

百十二

春

青木は死ぬ、岡見は隠れる、足立は任地を指して出掛けて了ふ、市川、菅、福富は相繼いで學問とか藝術の鑑賞とかいふ方へ向いた。連中は共同の事業に疲れて來た。

斯う成ると、恰も長い戦争に疲れた軍人のやうに、互に言ひたいことを言ふやうに成る。一人として脊負つて立たうとする者が無い。『第一、大將が大將らしくない、彼様どうも笑つて了ふやうな態度に出られては、折角神妙にして進んで行か

春

うとする若い者が立たん、『と言ふものがあれば、『君などが六號に隠れて居るといふ法はない、もつと出て來給へ、』といふものもあり、『僕はこれにて一番御奉公して、僕ばかり働いたツツマラない、』といふものもある。左様かと思ふと、『皆な同じやうに世間から思はれるのは心外だ、そんなことなら僕は退社する、』などと言ふものも出て來る。新しく仲間入した松浦、安藤などが、反つて仲裁者の位置に立つやうに成つた。

何のかんと言つても、連中は互ひに離れることが出来なかつた。斯ういふ中で岸本は大根島の二階に籠つて、自分は自分だけの道路を進みたいと思つて居た。自分等の眼前には未だく開拓されて居ない領分がある——廣い潤い領分がある。

青木はその一部分を開拓しやうとして、未完成な事業を残して死んだ。斯の

春

思想に勵まされて、岸本は彼の播種者が骨を埋めた處に立つて、コツ／＼その事業を繼續して見たいと思つた。

漠然とした恐怖は絶えず彼の胸を往つたり來つたりした。そのみならず、曾て家を忘れさせ、職業を捨てさせ、暗い寂しい旅にまで彼を押し出した力は、總て彼を無口にしたり、急に身體を震はせたり、譯もなく涙を流させたりする。麴町の學校を辭めて見ても、矢張仕事は出来なかつた。

四月のはじめ、彼は獨りて家を出て、上野公園から谷中を通つて、道灌山まで歩いて行つた。誰も來ないやうな場所へ彼は行きたいと思ふのであつた。彼の懐には平素愛讀する李白の詩集があつた。そこまで彼は泣きに行つた。

思ふさま泣いた。

一種の誘惑は其頃彼の身に附纏ふて居た。夫は關根から話のあつた養子の説である。彼は友達と思惑を恥ぢて、其様な話のあつたといふことすら打明けなかつた。母にも姉にも秘して居た。負ひきれない程の生活の重荷は、今、此話に耳を傾けさせるやうな場合にある。

春

百十三

『捨。』

斯う呼び起す母親の聲に驚かされて、岸本は眼を覺ました。また四邊は薄暗い。部屋の内には洋燈が細目に點けてある。四月中旬のある曉のことである。

母親と姉の二人は暗い臺所の方でいそがしさうに働いて居る。井戸端まで顔を洗ひに行つて、やがて岸本はシヨボク眼を擦り擦り歸つて来て見ると、幸平や愛子は未だ寝て居る。朝飯の用意が出来て、もう食べるばかりに膳が一つ出してある。岸本は着物を着更へて、その膳の前に對つた頃、麴屋の方で鳴く鶏の聲を聞いた。

春

氣のせはしない母親は、四時頃から起きて釜の下を焚付けたといふ。鍛冶橋に居る民助の許へ弟を面會に遣るといふことが、母親には最も大切な義務のやうに思はれて居た。面會と言へば、母親は昔諸大名を自分の家に泊めた時のやうに

暗いうちから起きる。左様してまめくしく立働くの、不幸な家長に對しての務めとして居る。未決檻から届いた手紙によれば、民助の控訴は聞かれなかつた。そこで彼は上告して身の明を立てやうとして居る。其爲に弟に逢ひたいのとことである。

春

『眠いの、御苦勞だのい。』

と母親は吾子の爲に飯をつけ乍ら言つた。

『捨さん、御苦勞さま。』と姉も臺所から來て言葉を添へた。『今度といふ今度は大丈夫無罪だらうと思つたに、控訴でも不可——私はもうガツカリして了つた。捨さんのことを考へると、眞實に御氣の毒でならない。』

『皆な無事で居るッて、左様言つてお呉れや。』と母親が言つた。

春

『兄さんに御逢ひなすつたら、何卒よろしく。』と姉も附添した。

白々と明放れた頃に、岸本は家を出た。明神を左に見て、湯島の坂を下りやうとすると、四月らしい朝の空氣のなかに下町の町々が見られる。遠く光る霞が彼の眼に映る。映るには映つたが、何となく糊付にでもして空に貼着けてあるやうに見えた。

『家の人を救ふことが出来るなら、自分はもう奈何でも可い。』

斯う岸本は歩き乍ら考へた。

あやしい運命が垂下げてよこしたやうな香餌は、今、彼の眼前に懸つて居る。關根は養子の話に就いて、あまり委しい説明もしなかつたが、對手の娘は曾て麴町の學校に居たこと、その娘は大きな家屋敷と地所とを親から譲られたこと、それ

がある田舎に在ること、それから娘は十人並と言ひたいが、まあ餘り器量の好い方ではないといふことなどを語り聞かせた。器量などは奈何でも可い、斯う彼は關根に言つた。而して關根に勧められて、いつか一度その娘に逢つて見やうといふ運びにまで進んで來て居る。家の人の爲——それは苦し紛れの言譯に過ぎなかつた。傲岸な彼の眼には、これは確かに恥づべき屈從であつた。しかし、その恥づべき屈從も、無職業の苦痛には勝るかのやうに見えたのである。途中で日が出た。岸本は、ある町と町との間から、霞を通してその紅い光を望んだが、別に何の感興も起さなかつた。彼は多くの物に興味を失つて了つた。

春

百十四

春

鍛冶橋監獄署の門前には、面會に來た男女が集つて、門の開くのを待つて居た。土手のところに蹲踞んで居るのもあつた。橋の畔に立つのもあつた。差入屋に腰を掛けて、面會願を書いて貰ふのもあつた。七時に門が開く。それより三十分ばかり前に、岸本は着いて居たのである。聽て門が開いた。人々は先を争つて入つて行つた。勝手を知らない面會人は我勝に番號札を得やうとして、御願くと言ひ乍ら受付の所に集る。これはたゞ到着の番號で、面會の番號ではない、騒ぐな、と守衛に叱られて、すぐ引下るの

もあつた。

控所は、庭を隔て、正面に受付、斜に未決檻の入口を望むやうな位置にある。二階は辯護士、階下は普通の面會人が腰掛ける所で、そこだけは土間に成つて居た。番號札を貰つて來た手合は、順にその控所へ集まつた。

春

岸本がこゝへ通ふのは最早三年越である。面會人としては古參の方である。十九番といふ番號札を握つて、腰を掛け乍ら眺めると、いづれも新顔の男女ばかりで、見知越の人は二人か三人しかなかつた。そのうちに、玄關側のところで、カチャ／＼音がした。閻が始まつたのであつた。

監獄署の圖箱は、矢張神社佛閣のそれに似たもので、片隅の穴から細長い竹の閻が出て來る。守衛がそれを掲げて見せる。面會の順番はそこで定るのである。岸

春

本は三十番といふ閻を引いた。

色の褪めた毛繻子の洋傘を小脇に擁へた女と、髪を櫛巻にして小供を負つた女とが、庭の隅で互ひに面會札を見せ合つて居たが、丁度其側を通る岸本に何番の閻を引いたかといふことを尋ねた。

『三十番?』と一人の女が言つた。『三十番ならお若い方ですよ。』

『貴女は?』と岸本は聞いて見る。

『斯ういふ老けたのを引いちまいました。』

とその女が自分の札を出して見せて、寂しさうに笑つた。『私は今日で、四日續けて來るんですけど、まだ一度も逢へない——運が悪いんですねえ。』

それを聞いて他の女は嘆息した。『薄情だと思はれたつて、閻が遅けりや仕方がな

いやね。』

二人は絶念めて門を出て行つた。

控所ひかへじよに集る人々あつちひとは、いづれも不安ふあんな眼付めづをして、互たがひにジロ／＼顔かほを見合せて居た。すこし高聲かうせいに談話だんわをするものが有ると、直すくに巡査じゆんさが咎とがめに來た。斯かうして待つて居る間あひだには、必かならず一人ひとりか二人ふたり特に視線しせんを集める人があつて、それを慰なぐさみに時ときを送るのが面會人めんくわいじんの常つねである。其日そのひも、蒼あをさめた顔かほを白く塗りかくして、帕子はんけちを首くびに巻付まきつけたやうな女をんなと、それから背せいのすらりとした、頬ほの薄紅うすあかい、微笑ほくそむ度たびに優やさしい皓齒しろはのあらはれるやうな、十八九ばかりの娘むすめとが來て居た。他の面會人めんくわいじんの眼めには、斯この二人ふたりは好いい對照たいせうであつた。岸本きしもとは柱はしらに倚凭よりかり乍なら、假かりに自分じぶんが養子やうしと成つた場合ばあひなどを想像さうぞうして、關根せきねが紹介せうかいしやうといふ對手あひての娘むすめのことを思つて

春

見た。彼あんな様な人ひとか知らん、斯こんな人ひとか知らんと、成なるべく好いい方ほうへ引付ひきつけて考かんがへるうちに、何時いつの間まにか眼前めんのまへに腰掛こしかけて居る可憐かれんな娘むすめの横顔よこがほに見恍みとれて居た。

『斯かう言いつたやうな人ひとだと好いいがなあ。』

と彼かれは自分じぶんで自分じぶんに言いつた。

器量きりやうなどは奈何どうでも可いい——左様さやういふ口くちを利きき乍なら、腹はらの中では奈何どうでも可いいで済すまされなかつた。矢張やば好いい方ほうが好いかつた。

春

春

『三十番。』

と巡査が控所へ来て呼んだ。

面會人は互ひに自分々々の札を取出して見た。丁度岸本の前に腰掛けて居た年増の女が、低聲に成つて、

『三十番は貴方ぢや有りませんか。』

と言つたので、其時岸本も氣が付いて、起上つた。

『先刻から三十番くと呼んでるのに、聞えないか。』

と巡査は腹立しさうに岸本の顔を見て言つた。岸本はキマリ悪げに控所を出た。他の面會人はいづれも彼の後姿を見て笑つた。

春

岸本が立つたのは、玄關側にある開放けた窓の下で、そこには制服着けた署吏が面會の要件を聴取る爲に控へて居た。

『其方は？』と署吏は筆を持ち乍ら岸本の方を瞰下して言つた。

『岸本捨吉。』

『あ、其方は民助の何に當るか。』

『弟です。』

其時署吏は机の上にある書類を繰つて見て、果して此の面會人が民助の實弟であるや否やを確かめた。

『面會の要件は？』

『在檻人安否問ひ尋ねの件——上告につき辯護士依頼の件——差入物の件——そ

れから、家族情况報告の件——』

署吏は岸本の言ふ通りに記しつけた。聽て彼がその窓の下を離れた頃は、最早面會所の戸が開いた。早い間に當つたものは順を追つてそこへ呼込まれて居た。

『何故、自分は斯様にボンヤリして居るんだらう。』

斯う自分で自分を嘲りながら、岸本は復た控所の柱に倚凭つた。右の膝の上へ左の膝を組合せて、兩手で其膝を抱くやうにして、すこし斯う仰向き氣味に頭を柱に着けて居ると、つい復た茫然考へる。眼を瞑ると、一週間はかり前に上野で見た洋畫の展覽會の光景が顯れる。始めて陳列された印象派風の明るい畫がある。光線と空氣とを通して雜然配置されたやうな景色がある。動搖した紫色の影がある。それを思ふと、高輪の學校で一緒に遊んだ友達などが、最早新しい美術家

春

として頭を持ち上げかけて居る。休憩室には、福富、菅、市川などの連中が集まつて、いづれも駝鳥の羽毛の軽い帽子を冠つて、露西亞卷の煙草を燻しながら、新畫の批評や美術上の話をして居る。そこには又、日清戰爭以後新に進んだ人物が出たり入つたりして居る。何となく代は變りつゝある。

急に隣の方から汗臭い、可厭な臭氣がして來た。眼を開いて見ると、疲勞したやうな顔付の男が何時の間にか自分の傍へ來て腰掛けて居た。例の娘は最早居なかつた。面會所の方からは泣き顔を見られまいとして、俯向勝に歸つて來る婦がある。『吾夫の顔を見たら胸がもう一ぱいで……』などと言ふ聲も聞える。

向ふの未決檻の内扉の側には、蒼ざめた顔色の女が巡査に引かれて通る。賤しい稼業の者が送られるらしい。

春

百十六

暗い箱馬車が其時門内へ引込まれた。而して、庭の内へ一回轉して、馬の頭が門の方へ向いた頃に止つた。未決檻の入口からは、日のめを見ることも少いやうな愛憎な眼付をして囚人等が、手にく汚れた風呂敷包を持ち乍ら出て来て、護衛の巡査と一緒に其馬車へ乗つた。中には馬車の窓から控所の方を盗むやうに見て装束の人達を可羨しやうに眺めるもあり、誰か逢ひに来て居る者はなからうかと

尋ね顔なのもある。

『巢鴨へ廻される連中だ。』

と面會人の一人が思はず口走つた。

馬は勇ましやうに嘶いた。慘憺とした思を傍觀する人々に殘して置いて、馬車は庭の小石の上を軌り乍ら出て行つた。

春
斯の光景を眺めて、岸本も思ひ沈んで居たが、懸て氣が付いて我に返つた頃は最早自分が面會の番に近づいて居る。間もなく彼は巡査に呼込まれて、小さな、狭い面會室の丸木を横へた欄の前に立つた。奥庭の小石を踏んで面會室の方へ近づいて来る人の蹻音がする。

『兄さんだ。』

と岸本は明耳を立てた。

コトリと欄の前にある小さな窓の戸が開いた。岸本兄弟は、其時互ひに着ざめた顔を合せた。氣の短さうな巡査が、欄と窓の境に立つて、面會の要件を讀み聞かせる間、民助は熱と耳を傾けて居た。例の未決檻の番號札を着物の襟に縫着けて、髪は短く、髭はすこし生して居る。寛大な氣風、あきらめの早い精神、兄らしい威嚴などの尖はれずにあるところは、岸本の身に取つて心強くも思はれたが、何となく斯う獄中の人らしい、可傷しい兄の顔付を眺めると、自然に弟の頭は下つて來た。

『簡單に言へ。そんな餘計なことを喋つては不可——斯の要件に書いてあるだけのことを言へ。』

春

春

斯う言咎められて、民助は巡査の方へ一寸會釋して、辯護士依頼に就いての希望を述べ、猶、此節のやうに差入が絶えては身軀が疲勞する、檻内で食物を買ふから金銭で入れて呉れよ、石町、大川端へも宜敷頼むとのことであつた。嚴重な監視の下で、制限ある時間に談話を交換するのであるから、面會は毎時器械的に終る。弟はたゞ兄の無事な顔を仰いで、氣休めに成るやうなことを言つて歸るに過ぎなかつた。

面會室を出て、

『あゝ、兄さんには家の方の事情がすこしも解らない。』

と岸本は獨り嘆息した。

不幸な兄の状況を報告する爲に、それから岸本は大根島の家を指して歸つて行

つた。彼の心は、家族のものを奈何しやう、養子の話を奈何しやう、自分を奈何しやうといふことで、満されて居た。

其晩可恐しく半鐘が鳴つた。本郷臺から見ると、麴町の方の空は真紅であつた。關根や岡見などが、多年の間苦心經營した學校は、一夜のうちに烏有に歸してつた。

春

百十七

それから二月ばかりは夢のやうに過ぎた。梅雨のあがらうとする頃には、岸本はもう全く別の職業の中に埋没もれて了ふ積りで、築地のなにがし園といふ方へ歩いて居た。そこは陶器畫を専門にする大きな仕事場であつた。

養子の話は奈何した。關根が對手の娘を紹介せると言つて、わざ／＼岸本を呼寄せたのは、丁度麴町の學校に卒業式のある日のこと、その娘も卒業生の集會に出て來て居るから、今に逢はせる、今に逢はせると言ふうちに暗くなつた。燒跡の混雜から、式はある他の場所を借受て、燈火の點く頃に始まつた。式の後、關根は岸本を人の居ないところへ連れて行つて、低聲に成つて、「岸本君、折角君をお呼びしましたが、どうも僕は君に彼の人を見せる勇氣がない——必と君は失望なさるから、『斯様なことで到頭岸本は逢はずに歸つた。幾月も頭腦を悩まして、幾

春

度も足を運んで、話のあつた當時から胸をドキ／＼させて、養子に行つた先方のことを種々に想像したり、空に日を送り乍ら待つて居たりしたことは——結局、後から考へるとボンヤリするやうなことに終つて了つた。とは言へ、彼は關根に感謝した。關根が躊躇した爲に、自分は反つて方向を過まらなかつた。冷汗を流した丈で済んだ。と思つた。

春

迷ひに迷つて居る岸本が、陶器の畫工といふ思想に落ちて行く迄には、種々な計畫を立て、見たのである。彼は兎に角、空想を實行しやうとして、事を始めて見る男である。ある時などは、後れ馳せながらも友達の後を追はうとして、大學の選科に入る準備を始めたこともあつた。郷里の方に嫁いて居る實の姉といふは、相應に暮して居るところから、其方へ岸本は手紙を送つて、在學中の補助を得た

いと考へた。その願は聞かれなかつた。斯様な風で、一月餘前から準備を始めかけた事もまた／＼尻のく／＼りを付けずに廢して了つた。

岸本は今、陶器畫の仕事場の方へ斯ういふ破れた心を運ぶ人である。今日食ふにすら困るやうな家族の人々を引受けて居乍ら、そんな不慣な職業をイロハのイの字から始めて一日幾何の手間代に成るかも考へない人である。

春

彼が陶器の畫工を擇んだといふことも、矢張一種の空想からであつた。其頃西洋から來たある美術雜誌の中に、『藝術は吾心を得たり』といふ題の畫があつた。男が片肌ぬぎで、大きな花瓶に餘念もなく草花の模様を畫いて居ると、女は戸口のところ立つて、其花瓶の畫に見惚れて居る。岸本は斯の畫中の人物から思付いた。畫といふよりは寫真板から思付いた。同じ一生を埋めるにしても、『藝術は吾心を

得たり』とても誰か言つて呉れるものが有れば、まだく埋め甲斐が有るかのやうに思つたのである。

園主は岸本を仕事場の片隅に導いた。廣い部屋には男も女も居た。園主は、先づ見習として、岸本に皿を一枚あてがつた。

春
「へえ、妙な男が舞込んで来たね。」
と人々は彼の方を見て囁き合つた。

新編

春

花瓶、皿、壺、珈琲茶碗などの雑然置並べてある屋の内に、机を接して仕事をし居る人々の多くは、顔の色蒼ざめた職工風の若い男でなければ、貧しい家から通つて来る給金取の娘であつた。斯の仕事場で盛に製造する物は、大抵輸出向の陶器で、形でも模様でも一定の型に依つて幾百組となく作る。皿なら皿、珈琲茶碗なら珈琲茶碗に相應する大體の模様の輪廓が先づ素地へ焼付けられる。娘は容易しさうな部分を塗る。男はその仕上をする。監督する人は別にあつて、多忙しさうに机と机の間を歩いたり、手に持つ十露盤で陶器の数を勘定したりした。その日はいやに熱かつた。唐紙や障子は悉く取拂はれて居たが、狭苦しいほどに集つて仕事をす人々の氣息、汗の香、それから庭の方で焼く竈の火氣の熱と

て、斯の仕事場の内は蒸されるやうである。柱の周圍に陣取つて居る女などは、もう恥も外聞も思つて居られないといふ風で、肥つた腕を肩の邊まで捲し上げるのもあれば、色の褪めた單衣物の袂で額の汗を拭取るのもある。

「奈何です、ツマクいさますかナ。」

と園主は岸本の傍へ來て言つて、不思議さうに彼の仕事をするとところを佇立み眺めて居た。

春

隣に机を並べて珈琲茶碗を置いて居る十八九ばかりの男が、其時岸本の方を覗いて見て、意味もなく微笑んだ。後向に並んで仕事をして居る小娘も互ひに眼と眼を見合せて笑つた。岸本のあてがはれた仕事は、金色に焼付けてある菓子皿の模様を手本にして、ドロくした紫色のインキのやうな薬を手本通に塗りさへす

春

れば可かつた。それには既に輪廓が出來て居る。其輪廓を辿つて行けば可いのである。十三四の小娘でも其様な仕事は造作もなくやつてのける。新參のかなしさには、先づそれから見習はねばならぬ。いかに他の職業の中へ埋没れて了ふ積りでも、是ではナサケなかつた。

隣の男は倦み疲れたといふ風で、時々耳のところへ細い筆を挿んで、病身らしい眼付をしながら溜息を吐いた。

「君は何方です。」と其男が尋ねた。

「私ですか。」と岸本は寂しさに笑つて、「私は本郷の方です。」

「本郷？ 本郷は高臺で好う御座んすなあ。」と言つて、其男は聞いて貰ひたいといふ風で、「僕は子、一月からこゝへ通つて居るんですけれど、身體が弱いものです

から奈何も思ふやうに行れませんよ。田舎から出て奮發する積りでも、僕見たいに身體が弱くては駄目ですね。」

斯う嘆息して、向ふの部屋の柱に倚凭つて居る男を指して見せた。

『彼處に居ませう——子。彼の人がかこしては一番腕の有る人なんです。あそこまで漕ぎ着けるのはなか／＼容易ぢやない。』

と言はれて、岸本は斯の仕事場で一番腕のあるといふ人を見た。其人も彼が豫想して來たやうな陶器の畫工らしくはなかつた。岸本は黙つて了つた。それぎりも隣の男と口を利なかつた。

春

百十九

春

斯の陶器畫の仕事場へ岸本を紹介したのは麴町の老先生であつた。老先生は洒落氣こそ多かつたが、若い者を遊ぶやうな人では無かつたから、唯陶器の畫も面白からう位の慰み半分な考へて、岸本の言ふなりに園主へ宛てた手紙を呉れたのであつた。物に拘泥しない老先生も、斯うして岸本が男や女の中に交つて、輸出向の菓子皿などを塗つて居ると聞いたなら、さぞ驚いたことであらう。繪畫を愛するのは岸本が天性に近かつた。彼は多少物の象を畫く力をも具へて居

春

た。小學校時代から高輪の學校時代へかけて、繪畫はむしろ彼の得意とするところであつた。斯の思想に勵まされて、彼は陶器の畫工を撰んだのである。萬更恃みにすることがなくて斯の仕事場へやつて來た譯でも無かつた。とは言へ、人の氣を腐らせるやうな職工仲間の空氣は、到底彼に適しなかつた。彼は最早一日で嫌に成つて了つた。

『まあ、よく考へてお出なさい。』

と園主は岸本に言つて別れたが、『中年者は見込が無い、』と言つたやうな眼付をして居た。

素焼の陶器が荷造のまゝ積重ねてある門のところを出て、大根島の方へ歸つて行く時の岸本は、二度とあの紫色の繪筆を持つ勇氣が無かつた。『大馬鹿！』と彼は

自分で自分を嘲つて、泣き出しさうな顔付をしながら歩いて行くと、眼の廻るやうにいそがしい町々の光景は漠然とした恐怖の念を起させる。用事ありげな人々を乗せた車は前から後からも驅けて通る。ボンヤリ考へ込んで歩いて居る彼は、どうかすると駈けて來る車夫に突飛ばされることも有つた。而して、可憐しい勢で引殺されさうな思をした。

春

大根島の家には、母親が心配して彼を待つて居た。丁度彼の留守に、菅が訪ねて來て、いろいろ彼の噂をして歸つたとのこと。母親はあの友達から、いかに吾子が間違つた思想を起したか、陶器の畫工が奈何いふ境涯のものであるかを聞知つた。

『其様なものに成る位なら、俺が行つて斷つて來る。』と母親が言つた。

『なにも、強ひて陶器の書工に成らうとは思つて居ないんです。』斯う岸本は苦笑して答へた。

『まあ、奈何して其様な氣に成つたずら。』と母親は岸本の顔を眺めて、『岸本さんは友達の言ふことを聞くやうな人でないからッて、お前、菅さんも左様仰つたよ。』

春

斯の『友達の言ふことを聞くやうな人でないから』が岸本には悲しかつた。

翌日、彼が築地まで断りに行つた時、園主は彼に花鳥模様のある美しい菓子皿を呉れた。兎に角一時は全く別世界に隠れて了ふ積りで、多少其方の心仕度もして繪畫に必要な道具を買ひ、参考になる書籍まで集めて見て、復た／＼其計畫も水の泡のやうに消えて了つた。空想の紀念としては、唯一枚の皿が残つた。

百二十

春

『自分は今、眼に見へない牢獄の中に居る。鍛冶橋に居る兄さんの爲には、彼程他が大騒ぎしても、自分が苦んで居ることを見て呉れる者が無い。あゝ病人は寧ろ幸福だ——身體の頑健なものはそこへ倒れるまで誰も知らずに居る。』

到頭岸本は斯ういふことを考へるやうに成つた。七月の下旬、ぶらりと大根畠の家を出て行かうとする頃の彼は、最早何事も爲る氣の無い人であつた。

『捨。』

と母親か呼留めたので、岸本は夏帽子を冠つたまゝ柱のところ立つた。

母親は聲を低くして、『先刻お米屋さんが催促に来たよ。それに、大屋さんへは未だ先月分が拂つてないって、姉さんが心配してる。お前、何とかしてやつてお呉れや——』

岸本は黙つて母親の顔を熟視つた。

春

『姉さんが、捨さんには氣の毒で私から言へないが、兄さんの方へもお金を入れるやうに母親さんから言つて貰いたいって——』

其時お杉さんといふ人が、臺所の方から出て來たので、母親は口を噤んで了つた。斯のお杉さんといふは、姉の姉で、今の亭主と口を利さ合つたやうな場合には、極りて飛出して來る。他に行く處もないから、岸本の家を便つて來る。磊落で、

放縱で、年はとつてもなか／＼の洒落者、内氣な妹に比べると、同じ姉妹とは思はれない。斯のお杉さんが頼むと言つて來れば、否とは言へないほど愛嬌のある人であつた。

『捨さん、また御厄介に成りに上りました。』

とお杉さんが言つた。

春

家を出て岸本は湯島の天神の方へ歩いて行つた。彼は錢取に出掛けるでもなく、職業を見つけないで、友達を訪ねに行くでもなかつた。時々彼は往來の片隅に佇立んで、通る人々をボンヤリ眺めたり、白い日を見て震へたりした。天神の境内にある口ハ臺は、斯ういふ岸本が腰を掛けて考へるに好い場所であつた。そこには手拭で頭を包み、胸を露出し、晝寐の夢を食つて居る人々がある。岸本

も櫻の葉の蔭を擇んで、清しい風の來る、日の光のチラ／＼するやうなところへ
 倚凭りながら眺めた。

唯は春

追想は岸本を樂しい高輪の學校時代へ連れて行つた。學校の圖書館へ入つて、西洋の詩人の傳記などを讀み耽つたのも、彼の時代である。御殿山の夕日を友達に指して見せて、始めて自然の美しさが自分の眼に映じたことを語つたのも、彼の時代である。チャペルの方で鐘が鳴つて、二階の窓から赤く灯が泄れる頃、あるひは文學、あるひは宗教、あるひは哲學に關する新説を聞かうとして、友達と一緒に寄宿舎から急いだのも、あの時代である。奈何に彼の時代は樂しかつたらう。櫻の樹の下へ長い竿を持つて來て、蟬を取らうとする少年の群があつた。追想は更に岸本を遠い少年の時代に連れて行つた。無邪氣な薪屋の子息や、頬の紅い時

春

計屋の娘などと一緒に遊んだ時代のことを考へると、今更のやうに其昔が可懐しく、戀しく、樂しく思はれた。

春

百二十一

空は明るくても、心は暗かつた。ロハ臺を離れて、天神の境内から切通坂の方へ行かうとすると、石段を下りきつた處に、人の脊よりは低い石の柱がある。鐵の欄はそこで止つて居る、そこでも彼は冷たい石の柱に倚凭り乍ら、往來の人を眺め

春

佇立んだ。そこは本郷臺から下谷の方へ落ちて居る傾斜の盡きやうとする處で、熱い日のあたつた坂道が眼前に見られる。重さうな荷車は幾臺か彼の前を通る。中には、足に力を入れて、ウン／＼言乍ら前の方から豆腐の滓渣を引いて行くのもあれば、其荷車の後へ頭を押付けて、聲も掛けずに押上げるのも有つた。青く光る空には、熱を帯つた白い夏雲が浮んで居る。それを見ても岸本は別に面白くもかしくも思はなかつた。切通坂の下まで行くと、町の右角に井戸があつて、釣瓶に口をつけながらガブ／＼飲んで居る男がある。其様な、汗をダラダラ流した労働者が、反つて彼の目に映つた。坂の左側を占領する邸のところには、その外廓を圍繞く廣い石の溝がある。塵埃除の樹木はそこに冷しい影を落して居る。その檜や柳の下には、ロハ臺で見たと

はまた全く別の階級の人々が集つて居る。すくなくもロハ臺に腰掛けて考へ込んで居るやうな手合には、『是から奈何しやう』と言つたやうな顔付の者が多い。斯の石の溝へ来て並んで居るものは、『是から奈何しやう』位の連中ではなかつた。第一、其様なところに其様な人達が集つて居るといふことすら、今迄岸本は氣が着かずに居たのである。

春

『オイ／＼妙な男がそこへ来て立つたぜ。』と白髪を短く刈つた、前齒の抜けた隠居が岸本の方を眺め乍ら、隣の男に囁いて聞かせた。『恐しく顔色の悪い亡者だなア。』と隣の男は、そこいらに落ちて居る細の片を拾つて、其で煙管の雁首を磨きながら囁き返した。『悪くすると池へ飛込むよ。』とまた一人の男が土塵にまみれた草鞋穿の足を投出

し乍ら嚇いた。

『は、は、は。』

嘲るやうな笑聲が一齊に起つた。斯の笑聲は岸本にも聞えた。尤も石の溝に腰掛けて居る連中は何を笑つたか解らないやうな風に笑つた。

其時、石の上に帽子を敷いて、破れた扇子を持ち乍ら居眠りして居た男は、急に斯の笑聲で眼を覺ました。

春

『何を笑つてるんだ。』と其若い男が眠さうな眼付をして尋ねる。

『貴様などに解つて堪るものかい。』と齒の抜けた隠居が戯れて、汚れた手拭で若い男の顔をクスグスやるやうに拂つた。

若い男は石の溝を離れた。彼は檜の葉蔭にある空車の上を擇んで、そこに破れた

春

筵を敷いて、裏返しにした帽子の中へ頭を突込み乍ら、大の字なりに寝轉んだ。蠅の群は来て穴のあいたシャツや大きな尻のところへ取り着いた。

不忍の池の方から、青い蓮の葉を渡つて来る風が、そこに樂い休息の世界を作つて居る。紙屑、皮、塵芥、綿などを積み載せた荷車がそこに置並べてある。荷馬車を引いて来た、棕櫚のやうな汚れた蠶の老馬も、そこへ来て止つた。日に焼けた羅宇屋もそこへ来て荷を卸した。而して、汗染た財布の中から其日の所得を取出して數へて居た。

『一體、俺は何しに斯様なところへ立つて居るんだらう。』
斯う岸本は自分で自分を笑つて、聽てその樹蔭を離れた。

春

日暮に近い頃まで、岸本は屋外で暮して、本郷の通を猿飴の横町の方へ曲らうとした時は、最早何となくそこいらが黄昏れて見えた。ふと途中で、岡見の兄の歩いて来るのに遭遇つた。

『岡見さん。』

『オ、岸本さん、しばらくしてたね。』

『何時御出掛でした。』

百二十二

春

『昨日ね、一寸用事が有つて大磯から出て来ましたよ。』

黄色く光る往來の瓦斯燈の影で、二人は斯様な言葉を交換した。今は以前のやうな調子ばかりでなく、幾分互ひに尊敬し合ふところも談話の中に交つて来て居る。それだけ他人行儀に近づいたとも言へる。が、矢張連中は連中だ。逢へば互ひに可懐しい。岸本は岡見の行く方へ一緒に歩いて、やがて今日の艱難な境涯を話し初めた。しかも其を言ひにくさうに話した。而して、何か未だ言ひたいことが有つて、其を言はずに居るといふ風であつた。岡見は薄々岸本の家の事情を聞いて知つて居る。自分が戀の成功に比べて、斯の若い友達の心情を思ひやらんではない。亡くなつた勝子は、自分が曾て愛した弟子でもあり、又、新しい妻の親友でもあつたことを考へないでもない。結局岸本の話は金に落ちて行つた。

岡見は例の俠氣から、

「話は早い方が可い。幾何ばかり、君、有れば可いんですか。」

と斯う言出した。彼は直に自分の懐を搜つた。

「十圓位で間に合ふことなら、今こゝで御用立しませう。」

と氣前を見せて、無造作に紙入の中から取出して渡した。岡見は友達を助けると

いふことに依つて、自分の性質を満足させた。いや、そればかりではない、彼は

戀の成功者として高い税を拂はせられた形である。

『では、兎に角拜借します。』

斯う岸本が言つて、その金を袂に入れて、それから岡見と別れた。

家では母や姉は最早夕飯を済まして、幸平一人膳に向つて食べて居るところであ

春

つた。毎時兄弟は一つの膳で食ふので、弟の分だけは一方に茶碗を伏せて、歸りを待顔に置並べてある。

「捨さん、お先へ頂きました。」と杉さんは楊枝をつかひ乍ら言つた。「今夜は、

旦那衆の方が後に成つて了つて——」

岸本は食ふ氣に成らなかつた。「僕は止さう。」

「奈何して？」と姉は引取つて、「一杯お上りな。捨さんの好きな茄子の御馳走で

すよ。」

と言はれたが、岸本は好物の野菜が膳に上つたのを見た丈で、箸を付けやうとはしなかつた。其時彼は岡見から借りて來た金を袂から出して、それを姉の手に渡した。

春

「捨さん、食べないんですか。そんなら僕が頂かう。」と幸平が言った。姉は呆れて、「ほんとに、幸さんの食べるには驚いちゃう。」

「斯うして置いたって、どうせ腐敗くなる物だ。」

と言つて、幸平は一方にある椀を自分の方へ引寄せた。斯の兄は大胡坐で、冷然として弟の分をも食つた。

翌朝、岸本は遅くまで寝て居た。働好きな母親は暑くならないうちと思つて、洗濯物を急いで、臺所の板の間で糊まで付けて、それを狭い裏口の物干竿に掛けて来て見ると、まだ岸本は寝て居た。表格子の方からは、最早熱苦しい日が射して来た。岸本は起きやうくとしても、どうしても頭が重くて持上らないといふ風で、唯臥床の上に悶き倒れて居る。そこで母親の手を借りた。丁度暴風の爲に倒れかゝつた樹木へ突支棒でもして、それで漸く舊の位置へ復したやうに、岸本は先づ頭から持上げて貰つて、漸く身體が自分のものに成つた。

すこしばかり物を食つた後、彼は二階にある自分の部屋へ行つた。そこで身の邊を眺め廻した。焼石に水とやら。岡見から借りた金ぐらゐで幾日を支へるとが出来やう。大抵は穴埋で済んで了ふ。母親、姉、幸平兄、愛子、それから鍛冶橋に

居る兄、一時たりともお杉さん——これらの人々を養ふといふことは、未熟な岸本の身を取つて、決して容易ではなかつた。兄を救ふため辯護士一人を頼むにすら、すくなからぬ金を要する。左様左様は親類でも届かないといふことに成る。石町の大將始め、大川端の叔父、國許の姉、いづれへも迷惑をかけられるだけ懸けた。今は親類も疲れて來た。

斯ういふ時に成つて、岸本の心はもう一度西京の峰子の方へ行つた。旅に出た當時、峰子から受けた親切を岸本は忘れずに居る。彼の母親さんか姉さんのやうな人が、一見自分を知己のやうに思つて、着物から宿の世話迄もして呉れて、旅費が足りないと言へば奈何工面をしてもこしらへて貸て呉れた、其人の情を彼は今に成つて思ひ出した。

およそ手紙の中で、金を貸して貰ひたいといふほど書きにくいものは無い。況して鎌倉以來一度も文通もせず、氣分が悪くて居るといふ噂を聞いても見舞状も出さず、別れなければ成らない時が來て別れて、それを先方でも潔く思つて呉れたやうなもの、後に成つて見ればそれとなく捨てた形の人である、その人に向つて、『御無沙汰仕りい』とは、いかに困難して居ても書きにくかつた。

不思議な、あさましい、平素は殆んど念頭にも浮ばないやうな思想が、其時浮んで來た。自分は未だ髪も黒く、頬も紅い——すくなくも斯の黒い髪や紅い頬に對して、十圓やそこいらの金は貸して呉れさうなものだ、と斯う思つて見た。其時彼は婦人の前に跪づく多くの薄志弱行な男子のことを考へて、年老いて好色な後家にかしづく壯年、有福な女に弄ばれる男妾、金の爲にはいかなる媚をも賣

らうとする美しい節操のない男子などを數へて、恥づべき自分の心情に於ては、すこしも左様いふ蕩子と違ふところがないかのやうに思つた。岸本は自分で自分の可厭な臭氣を嗅ぐやうな思をした。兎に角、西京へ宛て、金の無心の手紙を書いた。それから自分の机の傍に倒れて、復た死んだ人のやうに成つた。何時の間にか彼は深い熟睡に陥没つた。

春

百二十四

「まあ、斯様に寝る人が何處にあるすら。」

と母親は二階へ來て見て、呆れて、暫時岸本の寝顔を眺め乍ら立つて居たが、聽て戸棚から薄いものを出して、風邪を引かないやうに其を吾手に被けて呉れた。

「昨日から碌に御飯も食べない——必と身體の具合でも悪いのだらう。」

斯う獨語を言つて、母親は階下へ降りて行つた。

春

ふと岸本が眼を覺ました頃は、最早午後の三時過である。彼は前の晩から寢つぐにに寢たと言つても可い程寢て、まだそれでも寢足りないやうに思つて居る。

むつくと起き直つて、自分の机の前に坐つて見たが、寢過ぎと、疲勞と、夏の日の熱苦しさと何事も手に着かなかつた。本箱の中に並べてある種々な新しい思想を書いた書籍——寢食を忘れて愛讀した程の書籍——それも別に興味を起させな

かつた。岸本が落ちて行つた思想では、東西の大家が自分等青年に遺して置いて呉れた文學上の産物も多くは人間の徒勞を寫したものに過ぎない。悲壯な戯曲も徒に流した涙である。微妙な詩歌も溜息である。何を苦んで自分等は同じ事を繰返す必要が有らう——斯う暗く考へるやうに成つた。何の爲に其日まで骨を折つて來たのか、それが岸本には解らなくなつた。

復た彼は塵の上に倒れた。追想は彼を昨日ロハ臺で考へたと同じ時代へ連れて行つた。不思議なことには、前の日に思出した高輪の學校時代と、其日思出したとは大した相違である。自分——何年も思出したことのないやうな自分が、其時浮んで來た。其時の自分は未だ彼の學校へ入りたてで、貧生であるといふ自己の位置をも忘れて了つて、ひたすら富有な家から來て居る朋輩の眞似をして喜んだ自

分である。孔雀の眞似をして居た鴉である。虚飾の好きな自分は、不相應な洋服に半ズボンなどを穿いて、靴下も淺黄と白の華麗なのを好み、髪も奇麗に分けることを覚え、夏帽子の飾りには特に色の美しいリボンを巻付けて冠つたものである。彼の時分には、よく演説などをやつた。茶番をすると言つて、身振物眞似に浮身を扮した。會堂に説教のある日などは、若い人達と一緒に集つて、贊美歌を歌ふのが何よりの歡樂で、つい夢中で洗禮を受けた。彼の時分の朋輩には、それ／＼渾名があつて、それが各自の性質を能く顯はした。ある地方から出て來て居る男はガン／＼怒鳴るといふので『雷』、自分は出過ぎるといふところから『鑄掛屋の天秤棒』と付けられた。たまく／＼知人が訪ねて來て、一緒に高輪の町を歩いて居ると、向ふの方から朋輩がやつて來て、『オイ、天秤棒』など、呼掛けられた時は、

春

流石に閉口したものであつた。彼の時分には、各級一人づゝ級長といふものを選んだ。自分は首席を占めては居たが誰も「鑄掛屋の天秤棒」を級長に投票しやうといふものが無い。虚榮心の深い自分は、自分で自分を投票した。彼の時分には又、よく物を食ひに出掛けた。自分は錢も無いくせに、運動の時間といふと冗食に出掛けて、大分パン屋の婆さんに借をこしらへた。終には困つて、大川端の叔父に内證で、十八史略などを賣つた。男女交際などと言つて、浮かれ居たのも彼の時分である。

すくなくも自分は眞面目な人間である。斯う岸本は自分で自分のことを考へて居たが、彼の時分を思ひ出して見ると、その眞面目も宛にはならなかつた。

百二十五

春

すくなくも自分は正直である。斯う岸本は机の側に倒れながら、自分で自分のことを考へた。追想は更に彼を少年時代へ連れて行つた。而して、幼い時の自分といふものを見せた。

追想が岸本を連れて行つた處は、銀座の天金の横町にある藏造の家である。往來に向いて窓がある。その窓から明の射し込む三疊ばかりの玄關が曾て自分の勉強した部屋である。野心深い少年であつた自分が、ナポレオンの小傳などを讀んで、

感激して泣いたのも其窓の下である。その玄關と次の八疊の間は段々の付いた入口に成つて居て、今の大川端の弘が未だ人に背負つて居る頃、「バア」と自分が暗い處から出て大事な獅子息を威嚇したと言つて叱られたり、入口の壁と壁の間へ足を懸けて上るうちに落ちて氣絶をしたりした場處である。八疊の上には二階があつて、丁度自分が山猿のやうに、逆に登る稽古をした梯子がある。八疊には大きな書生が居て、夜は自分もそこへ集つて、同じ洋燈の下で書を読んだ。叔父は未だ大川端へ引移らない前のとて、其頃は美しい髻を生して居たが、代言人の試験を受けると言つては自分の机の前へ来て、自分に法律上の書籍を讀ませて、「それは斯様です」とか『彼様です』とか答へて、よく自分を試験掛に見立てたものであつた。八疊の次が板の間で、その奥に居間がある。叔母の臥床はもう其時分

から敷いてある。すこし叔母が氣分の好い時には、池の金魚の見るところへ家の人を集めて、病を慰める爲に花札を引いた。其時自分も雨だの日の出だの、書いてある札を持つて見て、『青タン』とか『三カツ』とかいふとを始めて習つた。よく臺所の方では、叔母の爲に牛肉のソップを製へた。儉約な老祖母は、そのソップ渣へ味を付けて自分等にも食はせたが、終にはそのにほひが鼻へ着いて、誰も食ふ氣に成れなかつた。仕方がないから、老祖母はそれを乾して、三時の茶といふと出した。そのソップを製へる爲に、生の牛肉を細かく塞の目に切つて、口の長い大きな徳利へ入れる、是がまた一役で、氣の長い者でなければ勤まらなかつた。丁度奥の二階には、叔父の親戚にあたる年老いた漢學者が親子連て來て世話に成つて居て、結句牛肉の切り役は斯の温厚な白髮の老先生へ廻つた。老先生

が眼鏡をかけて、階下で牛肉を切つて居る間は、奥の二階は閑寂として居る。そこには先生の書籍が置並べてある。机の上には先生の置忘れた金銭がある。其金銭を十銭許り盗んだものがある——斯の盗みをしたものが、自分だ。

そればかりではない。尾張町の夜店には野菜の市があつて、家の人が買ひに出掛けたものだ。自分もよく随いて行つた。そこには少年の眼を引き易いやうな繪本を商ふ店もある。美しい表紙畫の草雙紙が數多そこには並べてある。何がなしにその草雙紙が欲しくなつて、何度も——其前を往つたり來たりして、終に混雑に紛れ乍ら一冊懐中に入れた少年がある——斯の少年が、自分だ。其時自分は捕まらさうにして、命がけて逃げた。草雙紙は置場所困つて、溝の中へ裂いて捨てた。もし彼の時捕まつたら、自分の生涯は奈何な風に成つて行つたらう。

春

慚愧の情は少年の昔を眼前に活々として見せた。楽しく無邪氣に想像して居た時代は、實に岸本にとつて最も暗黒な、最も野蠻な感想のする時であつた。自分は荒くれた、仕末に畢へない、拘摸のやうな限付の少年であつたに相違ない。斯う思出して見ると、決して自分の正直も宛に成らなかつた。

春

百二十六

到頭岸本は階下の座敷へ寢床を敷いて貰つて、其上へ倒れるやうに成つた。傲岸

春

な彼は、未だそれでも自分の敗北を認めやうとはしなかつた。「我は敗北者なり」などとは小欠にも出したくなかつた。斯ういふ負惜みの強い、自分を知るとの少ない、肯と啞と聲とを兼ねたやうな青年が、人生とは何ぞやといふ疑問に逢着しながら、その解決に苦んで寢床の上に震へて居る光景は——丁度深傷を負つて戦場の草の中に倒れ乍ら、まだそれでも抵抗する氣で居る兵士のやうである。八月が來た。暑中休で書生はすくなくなつたが、種々な人が表格子の前を通る。白い着物がギラ／＼した日に反射する。それが岸本の寢て居る座敷から見られる。「捨さん、御醫者様を頼んで來て進ませうか。」と姉は枕許へ來て言つた。岸本は知らずに眠つて居る。苦しうな汗が彼の額のところに流れて居る。

春

「まあ、眠つてばかり居る病人だ。斯様な風に姉は言つて見た。」
 「お秋、そらッとして寢かしてお置き。その病人は疲勞れて居るんだらうよ。」と母親は冷しい風の來るところを擇んで、針仕事をひろげ乍ら聲を掛けた。ふと岸本が眼を覺まして四邊を眺め廻した頃は、急に夕立が落ちて來た。お杉さんは二階の雨戸を閉めに行く。母や姉は裏へ出て洗濯物を取込む。幸平兄は晝寢の夢を食つて居る。丁度そこへ表の格子を開けて菅が馳込んだ。親切な菅は岸本のことを心配して、訪ねて來たのであつた。「へえ、君は寢てるのかい。」と菅は上り端に立つて、濡れた薄羽織を脱ぎ乍ら言つた。其時岸本は寢床の上に跳起きた。彼の懷中には黒塗の鞘に入つた懷劔が隠してあ

つた。それは菅から返して貰つて、二階の本箱の引出に藏つて置いたものである。友達に見られまいとして、彼はそれを蒲團の下へ隠した。

斯ういふ精神の状態に在りながらも、岸本は自分の苦痛を友達に訴へやうとはしなかつたのである。彼は唯、暗い憤怒の影を額の處に見せて、悄然と寢床の上に坐つて居る。菅にはサツパリ様子が解らない。

『復たラブでも始まつたんぢやないか。』と菅が笑ひ乍ら言つた。

岸本は答へなかつた。彼は快活な友達の顔を眺めて、苦笑して居た。

『火事ア何處だア、丸山だ。』

斯う菅は子供の真似をして戯れた。

母や姉が集つて來てからは、二人はもう其様な話をしなかつた。夕立が通り過て

やがて屋の内が涼しくなる頃まで、二人の話は連中の噂で持切つた。その話の途中、菅は岡見が岸本を評した言葉を持出して、『まだそれでも君の方が、溝口よりは腰が据つてるトサ——溝口と一緒にされちや可愛さうだ。』斯う言つて笑つた。溝口は最も薄志弱行な男として、連中の間に知られて居た青年である。

『菅さんと話をしてるところを、傍で聞いてれば、ちつとも病人のやうぢや無い。』

斯う母親は、菅が歸つて行つた後で、吾子の顔を眺め乍ら言つた。

西京からも返事が來た。岸本は寢床の上に起直つて、峰子の手紙を開けて見た。

斯うある。

『——まことに御氣の毒とは存じし得共、何分にも薄給の身にて……』

春

慨然として死に赴いた青木の面影は、岸本の眼前にあつた。「我事畢れり」と言つた青木の言葉は、岸本の耳にあつた。幾度か彼はあの友達の後を追つて、懐劍を、寢床の中に隠して置いて、悶死しやうとしたのである。身體の壯健な彼には奈何しても死ねなかつた。絶望は彼を不思議な決心に導いた。

「親はもとより大切である。しかし自分の道を見出すといふことは猶大切だ。人

百二十七

春

は各自自分の道を見出すべきだ。何の爲に斯うして生きて居るのか、それすら解らないやうなことで、何處に親孝行が有らう。」

斯う自分で自分に辯解して、苦しさのあまりに旅行を思ひ立つた。

其時の岸本は、何處へ行つて了ふのか自分にも解らなかつた。あるひは最早歸つて来ないかも知れない。もし歸つて来ないにしても、自分は母に對し家の人々に對して、自分の力に出来るだけのことを盡した。是上は運命に任せるより外はない——まさか餓死するやうなこともなからう。斯う考へた。

そこで彼は寢床を離れた。

旅費の宛もなかつたから、岸本は自分の書籍を賣ることにした。二階へ上つて行つて見ると、何年か掛つて集めた藏書が貧しいながらも置並べてある。三輪で差

押に遇つた時、大半は失して了つたが、未だそれでも旅費を作る位はある。金に成りさうなものは、洋書は別にして、兩國の古本屋で集めた木版本の俳書、それから淺草で買つた唐本の類がある。貧書生の身で、苦心して集めたことを考へると賣るのはナサケなかつた。

岸本は窓のところへ行つた。そこで過去つたことを考へて見た。あの國府津の盜柑島に轉がつて、土の臭氣を嗅ぎ乍ら、もう一度斯の世の中へ歸らうといふことを思立つた時から、今日まで、何を自分は知り得たらう。何を知る爲に自分は歸つて來たらう——

ふと、其時、青木の歌の一節が岸本の胸に浮んだ。それは岸本が漂泊の旅に出た頃、彼を送る爲に青木の作つた歌である。青木の聲を聞くやうな歌である。

春

『一輪花のさけかしと
願ふころは、君のため——』

春

岸本は窓の處で斯の一節を繰返した。冷い涙は彼の蒼ざめた頬を傳つて流れ落ちた。

神田にある戀意な古本屋を指して、それから岸本は大根島の家を出た。偶然にも彼の乗つた人力車はある耳鼻科の醫者の新宅の前を通り過ぎた。麴町の學校で親しくした耳の遠い先生が斯の醫者の弟にあたる。何の氣なしにその耳の遠い先生を訪ねて見る積で、そこで車から降りた。居るかと思つて見ると、居る。其時

岸本は耳の遠い先生から、仙臺の學校の話聞いた。その學校から教師として岸本に来て貰ひたいといふ話が、其様なところで彼を待つて居た。

出稼——それは彼の望むところであつた。旅も出来る、多少家への仕送りも出来る、斯うなると書籍を賣りに行く必要はなくなつた。そこで仙臺行の話を持つて古本屋まで行かずに大根島へ引返した。

其日は、實に、一日のうちに種々なことがあつた。岸本に取つては忘れることの出来ない日であつた。

春

百二十八

春

月は空にあつた。時は夜の十二時に近い。涼しい風の来る不忍の池の畔へ集まつた男女も、二人減り、二人減りして、最早人の影が見えない。水に臨む家々でも多く戸を閉めて寝た。辨天の境内から出て来て、蒼白い闇の中を歸つて行く人々があつた。その中には、市川が居る、夏休で出て来た足立が居る、菅が居る、連中以外の人も居る、岸本も居る。いよく岸本は仙臺の方へ行くことに定つたので、彼の送別をかねて、其晩友達仲間と一緒に集つたのである。尤も俄の思付で、興は反つてその俄に思付いたところにあつた。

其晩は皆な酔つた。各自志すところは違つて居るにしても、猶ほ同じ親しい記憶

春

に繫がれて居ると思ひ起させた。市川も嘗もそこまで附合はうといふので、足立や岸本の行く方へ随いて来た。連中は一緒に池の畔を歩いた。盛に話したり飲食したりした部屋は、岸の是方から明るく見られる。灯は静な暗い水に映つて居る。一夕の清興は未だそこに残つて居るかのやうでもある。

夜の景色は夢のやうに見える。暗い柳は人のやうに立つて居る。あの細長い條から黄色な花が落ちて、青々とした新芽が吹出した頃から見ると、今は柳も髪を長く垂下げた女のやうに容つづつて居る。長閑なやうであわたいしい、楽しいやうで風雨の多い、努力の苦痛と浪費の悲哀とで満たされたやうな——若い、新しい、壮んな感想のする時節は、樹までも斯う苦勞させた。新造と言ひたいが、柳は最早年増にしか見えなかつた。

春

仲町の方へ曲らうとするところで、岸本は友達に別離を告げた。

市川は月あかりに岸本の顔を透して見て、例の下町風の丁寧な調子で、『もう御見送はいたしませんから。』

斯様に風に言つて、右の手を出した。岸本は其手を握つて別れた。

翌日、岸本の家では本郷の森川町へ引移つた。そこは二間ばかりの小さな平屋ではあつたが、勝手の好く出来た家で、狭いながら裏庭もあり、母や姉が留守居をするには別に不自由を感じなかつた。臺所の障子を開けると、直ぐ往來で、近くにある井戸へ水汲みに出掛けられる。干物は裏で出来る。丁度郷里から岸本の甥にあたる太一といふが、遊學の目的で出京して居て、此甥がまめくしく手傳つて呉れた。大根畠から荷車で運んで来たものは、何處へ形付くともなく、斯の

狭い屋の内へ納まつて了つた。

思がけない應援の手紙が北清に居る二番目の兄の許から届いた。留守宅の生活費は月々其方からも助けられるとに成つた。今は岸本も仙臺の方へ落ちて行くことが出来る。

春

百二十九

せめて一日ゆつくり東京で寝て行きたい。是より外に岸本の願ひは無いのであつた。それほど彼は疲れて居た。

春

先づ爲るだけの事を爲た上でなければ、休んでも休んだやうな気がしない。兄の民助の上告も、大審院での審判の結果によれば、甚だ好都合に行つた。控訴院判決の全部は破棄される。更に斯の裁判を名古屋の地方裁判所へ移すとある。上告は聞かれたのである。そこで民助は鍛冶橋の未決檻を出て、名古屋の方へ送られることに成つた。斯の見送りを済まさないうちは、岸本も肩が抜けたとは言はれなかつた。第一、母親が許さなかつた。

鍛冶橋から通知のあつた翌日、岸本は幸平兄と一緒に森川町の新しい住居を出た。其日は乾燥いだ、風の多い、日は熱くても割合に凄じ好いやうな日であつた。幸平と岸本とは三つしか違はない兄弟で、よく子供の時分には喧嘩して、兄が弟の頭をブン擲れば、弟は兄の顔を引掻いたりして、毎日のやうに啞合つたもの

である。『幸さんが顔を洗つた後なら、俺は洗はない、』などと云つて、弟がキタナイやうな顔付をすると、『何だ、この捨公、』と兄が言ふが早い、最早拳固がコッソリと飛んで来る。斯ういふ二人の兄弟が今は煙草の火を親しげに附合つて、弟は兄から『捨さん、捨さん』とか、『オイ、君』とか言つて頼みに思はれて居る。『捨さんは夢見たやうなことをよく言つてる人だ。』斯う兄は弟を評して笑つて居る。鍛冶橋監獄署の門前で、斯の兄弟は總領の民助兄が出て来るのに逢つた。

『兄さん、荷物を持ちませうか。』

と岸本は民助の傍へ近づいて、低聲で言つて見た。民助は巡査の思惑を憚つて、小脇に風呂敷包を擁へたなり出掛けた。

未決檻の囚人が地方へ送られるには、手数の掛つたもので、一々警察署へ掛つて

巡査から巡査へ引繼に渡される。名残惜しく思ふところから、幸平、捨吉の二人は民助の後に随つて、熱い土を踏み乍ら歩いて行つた。ある橋の畔、並木の蔭で、兄弟三人は暫時一緒に成つた。巡査は見て見ぬ振をして、汗を拭き乍ら休んで立つて居た。

兄弟は眼と眼を見合せた。『今度こそは青天白日の身に成つて歸つて来る。』斯う民助の眼が言つた。其時、岸本が巻煙草に火を點けて渡すと、民助は横の方へ向いて、チユウとそれを一息に吸つた。巡査は氣の毒がつて、笑つて見て居た。

高輪近くまで不幸な家長を見送つて、そこで弟等は別れた。假令一時の過失があつたにもせよ、それは最早長い未決檻の幽囚で澤山だ、法律は冷いものだ、と弟等は思つた。

歸路には、大傳馬町へも寄つて、清之助に別離を告げる積で、岸本は幸平兄に一足先へ歸つて貰つた。丁度清之助も居て、雑誌は是から一切自分の方で引受けてやる、仙臺へ行つて何か書けるやうであつたら送つて呉れ、斯様な話があつた。

『本船町、本船町』と言つて、こゝへ來ると必ず出る市川の噂か、此節ではあまり出なくなつた。

琴の音が聞える。

『あゝ、お涼さんだ。』

と岸本は自分で自分に言つた。其時、彼は市川が『吾戀は秋の野を行く水の如し』と言つたのを、胸に浮べて、何時の間にか其流れも堰止られたのであらうと想像した。思做しの故かして、その日の琴は激切な調を帯びて聞えた。彼の二人の情

人にすら、世の中は添遂るといふとを許さないのてあらうか。斯う岸本は心にはれに思つた。

『叔母さん、捨叔父さんは。』と物の太一は森川町の住居へ來て、勝手口の方から聲を掛けた。

『捨さんかい。』と姉は流許に躊躇んで、菓積の皮を剥きながら、『お晝の御飯を食

べたツきり、未だ寝てますよ。』

『へえ、お休みですか。』

『御馳走も何物も要らない——唯寝かして呉れッて、今朝から横に成つてる。でも明日發つとてふ人だから、母親さんが何か食べさせてやりたいッて、蕪漬汁でほんの送別會をします。何物ありませんけれど、お前さんもお相伴に——』と言つて、姉は腰を延ばして、『まあ、太一さん、お入りな。』
と言はれて甥は格子戸の方へ廻つた。

『今日は。』

斯う聲を掛けながら、甥が狭い入口の庭から見ると、奥に鞆や柳行李などが出している。母親は旅の着物を疊んで居る。幸平は縁側で煙草を燻して居る。岸本は

春

仰向に長くなつて、兩手を鳩尾の上に載けて、さもく草臥れたと言つたやうな風に寝て居る。

『お愛ちゃん、何か出来ますか。』

と甥は上り端の三疊で帽子を掛けながら言つた。愛子はその帽子掛の下に小さな机を置いて、千代紙で姉様を疊んで居る。狭い屋の内も取片付けて見れば、どうやらかうやら是丈の人が住まはれるやうに成つたのである。

甥は國許に嫁いて居る姉の惣領子息で、岸本と三歳しか違はない。背は岸本よりも高い。叔父甥といふよりは、兄弟に見える。

勝手の方では夕飯の仕度で忙がしかつた。母親は舊家の主婦として昔多くの人々を扱つた經驗から、田舎風の料理はいろく心得て居る方である。野菜の貯へ方

春

もよく知つて居る。漬物なども甘く食はせる。其日も母親が露を引受けて、姉は漬を搦る方へ廻つた。山葵卸ておろした眞白なやつが最早搦鉢の中にあつた。露をかけた鍋は沸々と煮立つて、やがて白い湯氣が臺所に満ち溢れた。母親はその湯氣の中で立働いた。

春

『叔母さん、御手傳しませう。』

と甥は姉の傍へ来て言つた。

『どうしても男衆の力には及はない。』

と言つて、姉は一生懸命に搦鉢を押へて居たが、どうかすると漬が搦粉木に纏み付く。甥が力を出せば、搦鉢は跳り出す。愛子まで来て押へた。

『さ、替りませう。』

と姉が手を出した。甥は搦粉木を離さなかつた。今度は右を左に持ち替へて、復たゴシ／＼やる。顔は紅くなる。

『ア、手が痛い。』

と到頭搦粉木を姉に渡した。漬は次第に柔かく眼んで来た。終にはペチャン／＼と音がして、押へて居るものゝ手を嘗めるやうに成つた。

春

『お秋、もう好かないか。』



斯う言ひ乍ら、母親は露の鍋を搦鉢の傍へ持つて来た。姉がそれを掬つて入れる。甥が交せる。漬はズル／＼グル／＼廻つて、白が出たり、茶色が出たりするうちに、聴て搦鉢の中へ一ぱいに成つた。

『一寸俺に鹽梅を見せとくれ。』

と母親が小皿を手に持ち乍ら言った。

長火鉢の處には、幸平が大胡座で、青海苔を炙つた。未だ岸本は寝て居る。

春

百三十一

『とつこしよ。』

と岸本は身を起して、先づ周囲を眺め廻した。

『捨さん、其位寝たら澤山だらう。最早御馳走が出来て待つてますぜ。』

斯う幸平に笑はれて、岸本はそこへ足を投出しながら、伸をしたり、大きな欠をしたりして、聴て又ホッと溜息を吐いた。

『叔父さん、お早う。』と甥は笑ひながら挨拶する。

『あゝ、太一さん、お出でしたか。』

と岸本も笑つて、顔を洗つて来る爲に井戸端の方へ行つた。

間もなく家の者は食事を爲に集つた。同じ夕飯でも明るい處で食べた方がツマからうといふので、其日は奥の方へ引越して、縁側に近いところへ膳を据ゑた。『どうも胡坐にやらないと、食つたやうな氣がしない』と言つて、幸平は腕まくりで始める。姉は薯蕷汁を掛ける役、母親は飯を盛つて待つて居て、それを各自の椀の中へあけた。

春

『捨、今日はお前の送別會だに、たんと食べとくれや。』と母親が言つた。

『太一さん、お鹽梅は奈何です。』と姉も言葉を添へる。

『どうして、岸本の祖母さんの御料理ですもの、悪からう筈がありません。』

『まあ、太一さんの御世辭の好いこと。』と姉は笑つて、岸本の方を見て、『捨さん弱いやないか、もうすこし御上りな。』

『そんなに強ひられても、駄目です。』と岸本は御辭儀をした。『今日は七杯しか入らない。』

『捨さん、七杯入れば、あまり入らない方でも無いでせう。』と幸平は笑つた。

『へえ、太一さん、お強ひ。』と母親は飯をあけて了つてから言つた。

甥は枕の中を眺めながら、『こりやあヒドい。なんぼなんでも最早澤山だ。』

『太一さんが其様なことを言つて奈何します。』と姉はその枕を引取つて、どろりとした泡のやうな汁を掛ける。

『面倒臭い——食つちまへ。』

到頭甥は搔込んで了つた。

佗しい生活はして居ても、斯ういふ送別の食事などに成ると、母親は眼前の境涯を忘れ勝であつた。彼女は、昔多くの客を款待したと同じやうな、應揚な心地に歸るのであつた。

幸平、太一、捨吉の三人は、すこし詰込過ぎた氣味で、帯を緩めるやら、呻吟るやらして居たが、母や姉が片付けて了つた頃には、三人とも長くなつた。動けな
いほど食つた譯でもなかつたが、妙に腹が脹れた。誰が打出すともなく臍の下あ

たりを打始めるものがある。それに連れて腹鼓の競争が始まる。

『馬鹿な男ばかり揃つてるなア。』

斯う笑ひながら、岸本は旅の鞆の側に仰向に成つて、一緒に調子を合せて居た。其時、格子戸のところに訪れるものがあつた。客と聞いて、三人は一齊に跳起きた。

春

『うん、菅君か。』

と岸本は上り端のところて友達に出逢つた。菅は格子戸に捉まつて話した。

『いよく明日行くな。』と菅は微笑みながら、格子を通して、岸本の方を覗くやうに見る。

『あゝ。』と言つて、岸本は友達顔を眺めた。『まあ入り給へな。』

『いや、左様しちや居られない。今月の雑誌が出来たから一冊持つて来たよ——今日傳馬町へ一寸寄つたもんだからね。』

と菅は八月の雑誌を岸本に渡して、そとくに別離を告げた。岸本は屋の外まで出て見送つた。

春

日が暮れてから、岸本は甥に手傳つて貰つて荷物を縛つた。過る年月の間の嬉しいや悲しいが、出發前の混雑に交つて、彼の胸中を往つたり來たりした。其晩は、實に、寂しかつた。斯の寂しさは長い苦闘の後でなければ思はないやうなものであつた。

春

出発の日は拂曉から雨で、上野の一番に間に合ふやうにと朝早く別離の茶を飲んだ。頃は、酷く降つて居た。前の晩に頼んで置いた人力車も来た。岸本は鞆と一緒に乗つた。『恐しく重い行李ですなあ』と呟き乍ら、車夫は着物と書籍とを詰込んだ。柳行李を運んで、それを蹴込のところ積んだ。母や兄は庭、姉と愛子は格子戸の外に立つて、傘をさしかけながら見送る。斯うして岸本は、幌の内から今一度家の中の顔を眺めて、『御機嫌克う』を取換して出掛けた。

それは最早八月の末で、毎年の氾濫を思はせるやうな季節であつた。上野の停車場

春

場には、東北行の汽車に乗後れまいとして、手荷物を提げたり、洋傘を持つたりした男女の旅客が多勢集つて居た。いづれも少しづつは濡れて生憎な天気だと言つたやうな顔付をしながら、列車の方を指して急いで行つた。中には腕まくり、尻端折、泥の着いた足駄を鳴らしく行くのもあつた。雨具を着た驛夫はいそがしさうに其間を驅廻つた。

發車の鈴の響き渡る頃には、岸本はある三等室に陣取つて、玻璃窓に近く腰掛けた。別に彼を見送る人もなかつた。應て車掌は相圖の笛を吹いた。石炭の煙は雨の爲に臥て、窓の外を暗く通り過ぎた。汽車は動き始めた。

岸本が旅の鞆の中には、前の日に菅が持つて来て呉れた例の雑誌が入れてある。それを取出して讀まうとする前に、ふと八戸行の當時が岸本の胸に浮んだ。彼は

春

斯の汽車で一度斯の線路を往復したことを思ひ浮べた。あの時は、都は未だ暑かつたが、白河あたりまで行くと最早秋で、紫苑の花などが路傍に咲亂れて居たことを思ひ浮べた。荒寥とした東北の地方へ落ちて行くといふことは、岸本に取つて別に可懐しく思はせることがあつた。同じ室内に腰掛けて、母親に倚凭つて居る幼い娘すら、何となく勝子や豊子の面影を忍ばせる。ズウ／＼鼻にかゝるやうな聲で談話をする旅客の容貌を見ても、東北人の特色は種々に見出すことが出来る。

岸本は雑誌を開けて見た。その中には、不忍辨天の境内で連中が集つた時の記事もあつた。市川の筆だ。

「栗田君に寄す。足立西より來り、岸本東奥に當年風流の影を追はんとす。歸る

春

近きであり、發する亦遠からず。友人こゝに相會せざるべからずと、一夜駕をつらねて小西湖上の一亭に上りしは、東臺の鐘早や九時を報せし頃なり。蓋し議忽ちにして成り、忽ちにして會せしもの、荷葉青々として欄を蔽ひ、涼風袂を拂つて冷かに、月は水を照して白し。長舟を湖心に浮べて斯の良夜を賞するが如し。某氏あり、意氣軒昂大詩人の頰を吐く。菅あり、慨然として然かも大に飲む。足立の志成り、堂々たる大家、尙眇たる一書生然たるを怪む。大丈夫この氣宇なかる可らずと、そり身に成りて快語滿堂を壓するは、この人。函山の美を説くは、菅。岸本は須らく東北の野に大いに美人を驅るべし、この勇、ありや否や、と諸子いよく長舌を弄して、終に吾壘を靡し來る。某氏更に杯を呼び、天女祠堂の門を出てしは、更既にふけし頃、湖畔人なく唯月と風とあるのみ。こ

の良夜盛會、栗田君なきを恨む。われ君を見ざること久し。則ち寄す。』
 讀み了つて、岸本は笑はずに居られなかつた。雜誌も此頃では悪くなつて、連中は皆な御義理で書いて居るが、旅で見ればそれも可憐しかつた。
 汽車が白河を通り越した頃には、岸本は最早遠く都を離れたやうな氣がした。寂しい降雨の音を聞きながら、何時來るとも知れないやうな空想の世界を夢みつ、彼は頭を窓のところに押付けて考へた。

『あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。』
 斯う思つて、深い溜息を吐いた。玻璃窓の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからシヨンポリと農家の軒下に立つ鶏の群などが映つたり消へたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の中で寐た。

復たザアと降つて來た。

(をばり)

291
 21582
 18

1386

明治四十一年十月十五日印刷
明治四十一年十月廿二日發行

著作人兼
發行人

鳥崎春樹
東京市淺草區新片町
一番地

發賣元

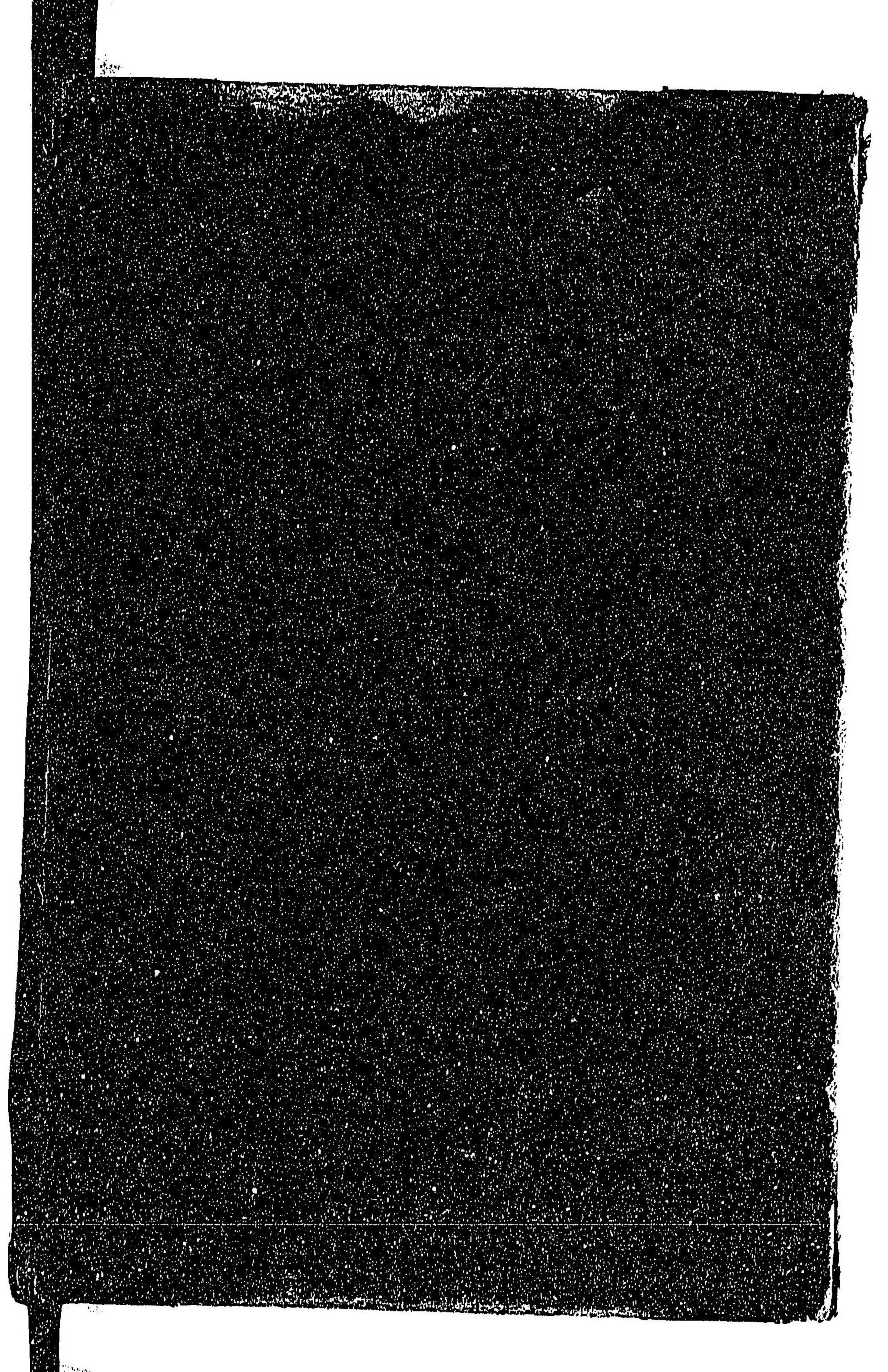
上田屋
東京市神田區裏神保町
一番地

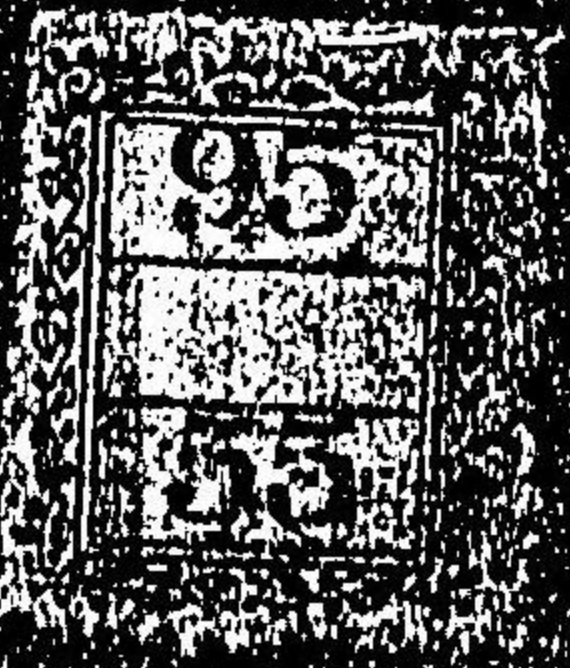
印刷者
印刷所

石川金太郎
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地
株式會社 秀英舍
東京市京橋區四紺屋町廿六七番地

定價金九拾錢
(料包小—市內金四錢·市外金八錢)

95
55





095032-000-2

95-55

春

島崎 藤村/著

M41

DBQ-2630

